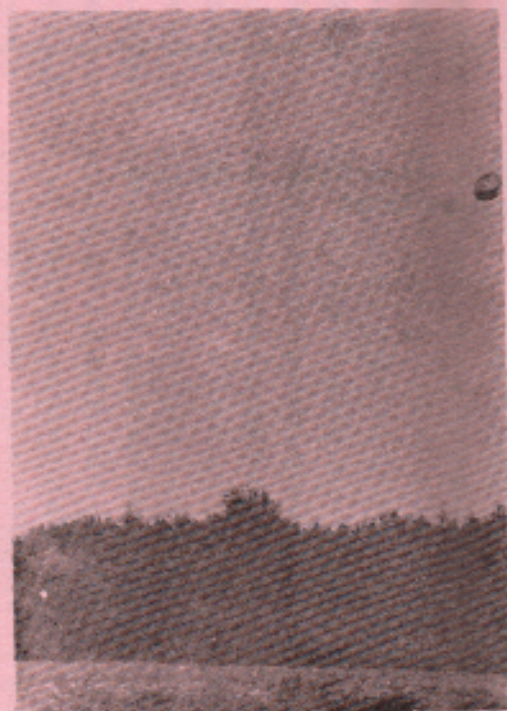


UFOと宇宙哲学の研究誌

日本GAP

ニューズレター



No. 41

日本GAPニューズレター
1970年・第41号目次

アポロ11号は円盤に遭遇した！	シャーロット・ブロッブ	1
月で何があったのか	荻沢潤一郎	3
フランスに着陸したUFO軍人	ジョエル・ムスナール	12
<写真>宮内温夫の入選作2点		15
ルーマニアに出現した円盤	フローリン・ゲオルギータ	16
テレパシーの体験	高原光夫	23
高校での会合	三田暁一	25
意識によるメッセージ	堀川とき	25
円盤の電磁場	村雨光之助	26

表紙写真は本号掲載記事「ルーマニアに出現した円盤」中の
写真3枚の内のNo. 1。詳細は同記事を—

アポロ11号は

円盤に遭遇した！

シャーロット・ブロンプ

十月十六日付のお手紙を受け取りました。すぐに返事が出せなかったことをお許し下さい。こちらはみな多忙で、いま講演会のスケジュールで手一杯です。すべてはうまくいっています。

写真類を有難う（注Ⅱ昨年九月二十三日の日本G&P総会の写真数葉を送った）。

さてご質問にお答え致します。

(1) アポロ11号は月面で何を発見したか？ については次のとおりです。二人の宇宙飛行士は月面上の発見事については他言するなと命ぜられました。宇宙人や円盤に関する情報を流すことに反対している人々（政府）は米国の宇宙開発計画の進歩に関係ある物事を大衆から隠しています。月面上の生命に関して宇宙飛行士が発見した多くの貴重な情報があります。クーパー少佐の事件を記憶していますか？ 彼は米航空宇宙局の初期の宇宙開発計画において地球を廻る軌道を飛んだ宇宙飛行士の一人です。クーパー少佐の報告によれば、軌道を十三回廻って下降しようとしたとき、衛星船のそばに二個の巨大な光る物体が飛んでいるのを見たとい、その物体の動き、大きさ、燃えるような輝きなどについて彼は仰天して絶叫しました。彼が着水して空母が収容したとき、

乗船していた多数の新聞記者にとり囲まれて、空中で一体何を見たのかと質問されました。彼がまさに答えようとしたとき、少佐のそばにいた二人の情報官がクーパーにむかって「UFOに関しては何もしゃべるな。情報部の本部からいざれ発表する」と命じたのです。ところが今日までこの件に関しては何の発表もありません。私がこの件をここに持ち出したのは、こうした事件がいかに巧みに隠されているかを知らせたいためです。

また宇宙飛行士が月面に着陸した側は単なる荒地で地面がきわめて高く（チベットの高地のような所）、空気もたいそう希薄でした。生命が主として存在するのは月の裏側です。月のリム（周縁）にもときどき何かの動きや活動が発見されています。一九五七年にパローマー天文台にいた天文学者でアダムスキーの親友であったジョンソン博士が望遠鏡を月にむけてのぞいたところ、月のリムにそって多くの生命活動を発見したといっています。

(2) パシル・ヴァン・デン・バーグ博士はどうなったか？ という質問については次のとおりです。（注Ⅱバーグは本誌第40号掲載の「私は金星文字を解読した！」の筆者）彼はあの金星文字の内容に関する発見を公表したとき失踪しました。彼はブラザーズから時期が来るまでは公開するなといわれていたのですが、夢中になってしまい、それに耳を傾けず、発見した事柄を公表し、ブラザーズとコンタクトしたことや静電気エンジンを作ったことまで洩らしました。そしてアダムスキーに会うために南アを出発したのですが、米國へ到着しないうちに途中のどこかで蒸発したのです。この蒸発にブラザーズは関係していないことを私は知っています。地球の政府（注Ⅱこれは複数となっており、どの國か

不明)の或る、破壊要素、が原因です。彼の発見を洩らすのに最適の時機があったのでしょう。そのときこそブラザーズが彼を援助することができたのでしょうが、ついにだめになりました。

私はバーグ博士の居所をつきとめようと努力してきました。近いうちにまた試みるつもりです。私は彼が連行された場所を知っているつもりですが、今もそこにいるかどうかはわかりません。いつか真相が判明するでしょう。

日本GAPのみなさんによるしくお伝え下さい。(一九六九年十一月四日付)

アダムスキー氏はイエスや仏陀がそうだったようにには自分の名を不滅化することを望みませんでした。また自分の名を冠した財団が設立されることも望みませんでした。彼は生前何度も私にむかって、礼拝の対象物にはなりたくない、地球のすべての子供たちの、自由の源泉になりたいといっていました。今彼を礼拝しようと思えばまず彼の兄弟姉妹になりなさい。万人はそうであるからです。アダムスキー氏はもはや私たちが知っているようなジョージ・アダムスキーではなく、別な惑星で高貴な青年となっており、この地球上の私たちの活動を確実に知っています。彼は全く礼拝されたがってはいません。宇宙の法則を応用して生きていくのです。

次の記事は一九六九年七月二十日に月に着陸したアポロ11号に關して今日私が受け取った報告です。

「一九六九年九月二十九日にナショナル・ブレティン誌が特別

記事を公開した。同年七月二十日に宇宙飛行士が月に着陸し、着

陸船から出て各種装置の設置を始めた。同誌によれば、米航空宇宙局は地上で受信した報告のテープ録音を秘密にしているという。ヒューストンの飛行管制センターはデイレイ・テープ技術を用いて、家庭のテレビに電波が流されるまでの数分間モニターたちがヴィデオ・オーディオ・テープを検閲できるようにし、こうして大衆に秘密が洩れないようにしたのである。この方法はホットラインやラジオの実況中継放送等にも用いられている。その理由は、驚くべき物事を洩らすことによって世界に大恐慌を起こしたくないからである。

次の会話はアームストロングとオールドリンのチームが司令船に帰ったとき地上の管制センターと交わした会話のテープ録音である。(注||以下「セ」とあるのはセンター、「字」とあるのは宇宙飛行士)

セ「それは何だったか? 一体何だったのだ? それを知りたいのだが」

字「その赤ん坊共は巨大だった。たいした物だ」

字「ノウ、ノウ、ただのフィールド・ディストーション・・・あなたらは信じないだろう・・・」

セ「なに?・・・なに?・・・なにが起こったのか? 君たちはどうしたんだ?」

字「彼らがそこにいるんだ。地面の下に・・・」

セ「何がいるんだい?・・・(とぎれる)アポロ11。こちらは地上飛行管制センター」

字「了解。こちら三人共無事。訪問者(複数)を発見した」

宇「そう、彼らは装置で測りながら長いあいだここに来ていたんだ」

セ「こちらセンター。最後の言葉をくり返せ・・・」

宇「いいか、月面に別な宇宙船がいるんだ！ それらはクレータ

ーのフチのむこう側に列をなして並んでいる」

セ「くり返せ、くり返せ」

宇「軌道を精査して地球へ向かおう」

宇「第十五へ六二五の中に（注IIこの数字の意味不明）オートリ

レーをセプト・・・両手がひどく震えてできない・・・」

宇「フィルム・・・ちきしょう！ この罰あたりのカメラマめ。

ここからうまく撮れねえぞ。こちらセンターは何か聞いたか？」

宇「もうフィルムがない・・・（とぎれる）円盤を三枚撮ったぞ

・・・フィルムをくもらせたかもしれない」

セ「こちらセンター。こちら進行中か。くり返せ。進行中か？」

UFOに関するその騒ぎは何だ？」

宇「彼らがそこにいるんだ・・・月面にいてわれわれを見つめ

ているよ・・・」

セ「反射鏡、反射鏡・・・反射鏡をセプトしたんだろう？」

宇「了解。反射鏡は適當の位置にある。だが何者かあの宇宙船を

作ったにしても、明日こちらへやって来て根こそぎこれらを（地

面にセプトした装置類を）引き抜くかもしれない」

以上の記録はあなた自身の感覚に従って判断して下さい。この
ような事件が起こっていたことが私にはわかっています。しかし
右の会話が一語一語正確であるかどうかは断言できません。たし

かはまだ一般に知らされていない物事が沢山あるのです。日本G
APのみなさんによくお伝え下さい。（十二月一日付）

アポロ情報の検討

か の た の あ が 何 が 月 で

一 郎 潤 沢 菲

一九六九年という年は、人類が地球以外の天
体に到達した、非常に意義深い年でした。五月
にアポロ10号が月への往復飛行に成功し、七月
にはアームストロング飛行士が11号でついに月
面上におり立ち、さらに十一月に入ってから二
度目の月旅行をやり終えてしまいました。ソ
ビエト連邦の注目すべき動きが聞けなかったもの
の、11号での初の月着陸をピークに、まさに宇
宙元年の名にふさわしい一年であったといえま
しょう。

私達にとって最も関心のあったことは、これ
らの輝かしい宇宙開発の成果によって、どれだ
け宇宙の真実が明かされて来るだろうかという
ことでした。ややもすると、表面のはなやかさ
に気をとられてしまつて、そこでどのような事
実が観測されているのかということを見過ごし
やすいようです。私も10号11号頃は主立った新
聞記事を切り抜いておくくらいで、たいした注
意もしてはいませんでした。また当局でも、極

力さしつかえる情報は流さなかったと見えて、表面的なことしか報導されなかったようでありませぬ。

これが12号頃になりますと、一般の興味もうすらいで来ておりましたので、はなやかな記事が少なくなり、観測データなどがひんぱんに出るようになり、私達の目にもおやつと思わせるような事が出てまいりました。

アポロ11号の三飛行士が来日したり、月の石が日本でも公開され、12号が月から帰って来たこの年のくれ頃、GAP仲間で、どうも発表されている情報の中におかしな所があるようだと言ってくる人がおりましたので、さっそく集めたり新聞記事や雑誌などの整理をやってみましたところ、アダムスキー等によって知らされている月面の状態を裏付ける多くの事が出てくる事に気付いたので。そしてあの素晴らしいニュースがアメリカから日本GAPにもたらされたのであります。

アポロ10号 —ぬれた粘土のようだ—

月への旅行に際し、まず月のまわりをまわって無事地球へ帰って来るといふ事が試みられたわけでありませぬ。

飛行士はスタッフォード、サーナン、ヤングの三人で、日本時間五月二十三日の早朝、月面から一五、二〇〇メートルの距離まで接近し、月の裏と表をつぶさにその目で観察したわけです。このくらいの距離だと四、五階建のビルくらいのを判別できるようです。

また、こうして月をまわりながら、二千枚の白黒写真と、映画十八巻を撮影しておりますが、その一部が公けにされているだけです。おそらくは、あのアポロ8号が写した、湖と思われるツイオルコフ

スキーの近影以上の素晴らしい写真がたくさん撮られたにちがひありません。

しかし、報告されているだけでも、いくつかの興味深い事があります。

まず第一は、いわゆる「サイドワインダー」(ガラガラへび)と命名された、例のひからびた川のような「流れ」です。それらはちやうどニューメキシコ州やアリゾナ州にあるような、砂漠地帯の干涸びた川にそっくりであったということ。この「流れ」の原因については、「月に昔あった水によってできた」とする説や「火山の溶岩流のあとだ」などといわれていますが、私は、それらのあるものの中に、底の蛇行の具合が、水の流れによってえぐられたようになっている事から、水によってできたものもあると考えます。

また月の表面については、「ぬれた粘土のようになめらかだ」と報告して来ているのは実際のどのような状態だったのでしょうか。ヤング飛行士は「月がどんなかは、実際に見てみないとわからないよ」といっています。水の存在については、後の方でも取り上げてみます。

もうひとつ10号の観測によって面白いのは、月面上の光点についてであります。特に裏でそれらが見られたようです。

クレーターの内には、中心がポーンと光るものがある。放射線で見えられたみたいだ。とても弱い光だが・・・(アポロ)

「月の裏側の一部分はクリスマス・ツリーのように光っている」(ヤング)

これは、アポロが太陽光の中から明暗境界線を越えて暗い部分に入ると、それまで真黒に見えていた月面がポーンと光りだすという

こととは別のものようです。それは地球がどの位置にいたかによってですが、地球からの照り返しによるとも考えられますが、裏側にまわってしまえば絶対に地球は見えないはずですから、発光は何か別のものということになります。

地球上で、夜どこかの大会の上をジェット機で飛んでみたら、ちよどここの宇宙飛行士が発したのと同じ言葉が聞かれることでしょう。「クリスマス・ツリーのようにキラキラと街の明りが見えて、何と美しい事だろう」と。そして遠のくにつれて、たくさんのイルミネーションやネオンが、その地区全体をポーツと明るく浮き上がらせて見えることでしょう。

「空飛ぶ円盤同乗記」などによれば、山から水を引いて、谷や山腹に大小多くの都市があるとされています。そして、都市に隣接した比較的広い地域、すなわち火口の内側に彼等の宇宙船の格納庫である巨大なビルディングが建てられていると。

ですから、夜であった月の裏側を見たアポロの飛行士たちは、当然それらのいくつかを見ていることになります。

このほか、火口壁の地層の発見、風化現象、まるで雪をかぶったような白い頭の突出した富士山のような山など、もっと詳しく知りたい情報がたくさん出ておりました。

アポロ11号 — 動物がいたら観察するヨ—

それからわずか二か月後に、地球人類の造った宇宙船で始めてわれら地球人が月面に降り立ったわけでありました。だれのために読ませようというのか、着陸船の足に「われわれはすべての人類のために平和裏にやって来た。ここに地球より、人類初めて月に立つ」と

うたった記念プレートをつけ、アームストロング、コリンズ、オルドリンの三人が月に向かったのです。

まず月へ行くまでの宇宙空間の様子が、ヒューストンの管制センターとの交信として伝えられていました。

「アポロ—空は黒いというより、バラ色に輝いているところもあるので、星01号は見えません。六分儀をいろいろ操作してみたら、やはり見えません……」

「ヒューストン—いま汚水を船外に飛ばしてしまっているから、星を手掛りに運航をする地点に到達するまでに約一時間かかる……」

アポロ—望遠鏡はあまり役に立たないね。六分儀を使えば、水滴と星を見分けることができる。動きがそれぞれ違うからね。

ヒューストン—それはたくさんの水滴がまだ船体についているが、星との見分けはつくということかい？

アポロ—そうだ……

アポロ—また星が見えるようになり、こんどの飛行で初めて星座を識別できた。

空は星でいっぱい。地球の夜と全く同じだ。しかしこちらではとどきとどきしか星が見えない。また星の散らばり具合はわからない……」

宇宙空間で星が見えないというのは、以前から彼等が持ち帰った写真に一枚も星が写っていないということから、私が推測していた事でありましたが、これはアダムスキーがすでに体験している事で、彼は「宇宙空間が完全に暗黒なのに驚いた」という表現であらわしています。この事が11号の飛行士達によっても、ほとんど宇宙空間

では星が見えないということが明らかになつたわけでありませう。さらに、バラ色に光っている所があるというのはどういう事なのでありませう。実に不思議な事です。あるいは、真空の宇宙空間に出た水が、水滴のままでも何時間も船外に付着しているという事は理に合いません。この答えは、実はアダムスキーの体験によつて解かるのであります。彼は巨大な宇宙船の外に何の宇宙服も身に着けずに出歩いています。これは、宇宙空間にある物体の表面には必ずある程度のガス体が発生するものであるとブラザーズから教えられているからです。

いわゆる真空とされている宇宙は、われわれが考えている以上の何かを含んでいると認めなければなりません。

「アポロ窓のまわりに何か小さな粒子のようなものが踊っているのが見える。いま窓ぎわで微粒子を見ているところだ……」

アポロ11号が着陸する予定の地点から約千キロほど離れたアリスタルコス火口で、ちょうどこの頃発光現象が起きておりました。これはソ連の天文学者コズイレフ博士やオランダ国立天文台等が発見して、警告していたものですが、これを飛行士達は見ておりました。

「アポロ11号アリスタルコスに面しているのかどうかこの距離では分らないが、かなり明るくなっている地域がある。ケイ光のように見える。クレーター地帯の中の一つのクレーターが全く明るい……」

……全く明るい地帯があるよ。リン光かどうか分らない……」この光は火山活動でシアンガスが出てるとコズイレフ博士等はいつていますが、10号の飛行士が見たクリスマスツリーのような光もあり、正体が何であるか、私たちには写真一枚ないのでわかりま

せん。しかしこの辺は多くの発光現象などの変化が観測される所で、地球側に面している地帯の中でも私たちの注目すべき所の一つです。

さていよいよ月面着陸態勢に入る……。

ここで重大なトラブルが発生しました。高度約九千メートルからコンピュータの故障が起き、これはそれまで飛行士が模型装置で行なつた全ての想定訓練で一度もなかつた故障であつたとアームストロングはいつています。発表ではコンピュータのオーバーワークだとされていますが、計器類は着陸放棄の警報を告げていたのです。

このトラブルが、円盤が航空機に接近したときに起こる計器の狂いと同じではないかと思われるのです。地球の人類が初めて他の天体に到達せんとして、月に近づいていたとき、月在住のブラザーズが近づいて見守るといふことは当然の事と思われるからです。

しかし、それにしても、この危機を押しなぜ着陸を強行できたのでありませうか。最初の警報が伝えられたとき、地上管制チームのメンバーの一技師が、この際、着陸レーダーの作動に関する乗組員の質問に答えないで強行を決断したといわれていますが、これは他にどのような確信がなければ下せるものではありませぬ。ブラザーズの何らかの連絡があつたのではないでしやうか。

着陸の際のこのトラブルの推測を裏付けるかのように、その後やはり飛行士たちが、一般向けでない通信チャネルで、近くに着陸船以外の宇宙機が見えることを報告していたというニュースが伝わつて来たわけです。事実、着陸後ハッチを開くまでなど、だいぶ空白

の時間があります。われわれとしては何としてもこの事実の確証を得たいものです。

月面に降り立ってから、月表面がどのような状態であったかは、以前と同様、非常に漠然とした情報しかなく、後の分析結果の発表も、実に当りさわりのない内容のものでした。

「イーグルⅡわれわれは忙しかったし、特に圧力の変更では予想よりもむずかしくて、実際予定したよりも月面歩行に出るまでの時間が長くなった」

「イーグルⅡここからは（月面着陸後）星は見えない。だが頭上のハッチを通して地球が見える。・・・オルドリンが何とか星を見つけてようと光学装置をのぞいている」

「・・・月面歩行活動は温度もかなり上がったが、宇宙服のおかげで非常に心地よかった」

「船外の気温は寒いらしい。」「気温はどうか」との地上の問合せに、宇宙飛行士は「おう」と声をふるわせて寒いことを示す」

「アームストロングⅡイーグルの影に入ると、ちょっと感じが違う。宇宙服を着ていても、影の方がやはり涼しいような感じだ・・・」

「アームストロングⅡ足元がやわらかいので、足場が悪い・・・」
「イーグルⅡ標本は十分つまっている感じだ。コア・チューブにくつつく様子は、いわば湿っている、という印象だった」

ヒューズトンⅡ湿った感じ、了解。こちらでは船外活動の前に君たちが描写した情景を記録してある。月の地質についてそれ以上の説明はないか。

イーグルⅡその考えは明日まで待ってもらえまいか・・・（?）

注目される通信内容を例記してみました。

最初のは、船内気圧を「真空」にするのに手間取ったというのと星が月面で見えないというものですが、この両者の記述の裏に、ある一つの事が共通して隠されているのではないのでしょうか。

すなわち、ある程度の大気が存在です。全くの真空ではないために、船内気圧をそれと等しくするのに手間がかかり、また、昼間といっても朝方ですが、とにかく日が登っている星が見えない。これは大気のせいでは、少なくともエベレスト山頂くらいの大気があるのではないのでしょうか。エベレストくらいですと、昼間でも星が見えるということですよ。

次に気温が暑いとか寒いとかいっていますが、実際は何度だったのか発表されていないようです。

また、土が湿った感じだというのは、実際はどうなのか、問題です。

地球へ土を持って来て、真空の中に入れてから調べても、土中に含まれた水素ガスもみな発散してしまい、全て味もそっけもない物になるのはあたりまえで、そうした分析結果で満足している大衆こそ、ごまかされているといわねばなりません。

だいたい、月物質をたくさん積んで帰って来るときの船内は相当な湿度になっていたという事実が、11号の場合も、12号のときもあったのです。

アポロ12号 — テレビカメラはなぜこわれたか —

月面状態についての情報は、12号になるとがぜん豊富になって来

ます。一般では11号の方が騒がれ、12号はあまり見向きもされなかつたといわれますが、実質的な内容がよりたくさん公表されたのは後者の方でした。

特に、近くに以前月に行ったサーベイヤー3号が残っており、またより充実した観測機器と、夜でも使える原子力発電機などがそろっていた事が、地味ではあっても、多彩な情報が流れた原因でした。

観測装置類の中に、大気測定器と電離層測定器もしくは月雲計とというのがありました。まさしくこれは大気存在を前提としたもので、この真の数値を知りたいものです。後に地球の百万分の一の大気が観測されたと発表されましたが、これでさえ多すぎると学者連から反発され、結局、この数値は機械が狂って、あやまった報告をしてきたものだといふふうに撤回されてしまいました。

さて月に着陸したのはコンラッドとビン飛行士で、着陸地点の東南わずか一八〇メートルのところ二年七か月前に到着したサーベイヤー3号がありました。

またこのときは、カラーテレビで地球へ生中継することになっておりましたが、どうもおかしな操作をして故障させてしまい、結局ほとんど月面の様子は一般へは見せずに終わってしまいました。だいたい中継を始めてじきにカメラを逆さまにしてしまい、三十分近くもほっておいて、それが直ってチラッと月面の様子が流れたかと思つたら、プツンともう切れてしまいました。ヒューズトンではカメラが太陽光線で焼けたといっています。私たちにっては臭いにおいがプンプンいたします。

どうも、着陸船からの通信内容を調べますと、このカメラの故障

の裏には、大きな別の一つの理由があったように思われます。

それは「風が吹いていた」のです。もちろん大気存在が裏付けられて来ます。

まず着陸してからの第一声がこれです。

「着陸船||ヒューズトン、11号の時よりすごいホコリが舞い上がっている。外はすばらしくきれいだ」

あたりがほこりっぽいのは相当なものだったようです。

「コンラッド||歩くとホコリが舞い上がる」

装置類をおろして、はこんでいる足元でホコリが上がっている様子を写したカラー写真が、その後発表されています。また、この装置類をおろして、その包装してある紙を取ろうとしたとき、次のような会話がかわされています。

「コンラッド||包装紙をとると、まるで風に吹き飛ばされるようだ」

「ビン||いまボンと投げたら三百フィート(約九十メートル)も遠くに飛んだ」

真空中の月面で、どうして紙が風に飛ばされるのでしょうか!

こうしたホコリで、おそらく観測装置がよごれたらしく、ビンは、別のこん跡を残してあります。それは例のサーベイヤーです。これは本体が白く塗られ、台が水色をしていたのですが、飛行士が近づいて行ってみると、全体が茶色に変色していたといえます。これは一時太陽の光で焼け上がったのだらうと報導されましたが、これは間違いで、アポロの科学観測担当学者が記者会見でいったように「月面物質が舞い上がって表面にくっついたもの」なのです。な

せならその表面には月の土と同色のこまかいホコリがついていて、指でこするとぬぐえて、下から地の色が出てきたからです。以上の事実は、このサーベイヤーが月におりてから、この時までの二年七か月の間に、何かの現象によって月の土ホコリが舞い上げられたことを意味します。いったい何が舞い上げたのか。真空だとすれば、いったい何が考えられるでしょうか。

実際は真空でなかったからこそ、風によって舞い上げられたと推測されるわけです。コンラッドが月面活動の始めの方で、緊急サンプルを採取中、次のような事をいっています。

「何か音が聞こえる。なぜだろう」

いったい何の音だというのでしょうか。レシーバーが耳に当たっているはずですし、ヘルメットもかぶっているのですから、不思議がるような音とは何でしょう。不思議な音は外からのものではないでしょうか。そして、それは外気がなければ、もちろん聞かえないはずです。

またヒューズトンから次のような興味深い発表がなされています。——十一月二十日。AFP)使用ずみの月着陸船イントレピッドを月面に衝突させた際、科学観測装置が、空間を伝わってきた衝撃波を記録したことが明らかにされた——

この衝突は、本来は月で一種の人口地震を起こして地殻構造などを調べようというものでしたのです。しかしこの場合の、空間を伝わってきた波」とはいったい何でしょうか。それは、音、ではありませんか！ しかも、衝突した地点は、12号の観測装置のある所から七十キロも離れた所で、そんなに遠くの音さえも伝えるだけの媒体、すなわち大気が月表面にはあるという事になるのです。

舞い上げられたホコリの件にせよ、空間を伝わって来た音にしろ、いずれも大気存在を裏付ける事になるわけです。

いずれにせよカメラの故障は、この風が原因だったようです。機材をほどこいた包装紙が風でバラバラしたり、吹き飛んだり、あるいは打ち立てた星条旗がハタメイたりすれば、地上で見ている方にもすぐ分かってしまうわけで、大問題となります。しかし、少しの間でしたが、着陸船を覆うものが風で揺れていたのをテレビで実際見たという人もいます。とにかく当局はこれを中継するわけにはいかなかったのです。

次は、土の性質と水の存在が問題になります。

土は相当こまかい粒子で、ちょっとしたはずみで舞い上がるほどかわいた感じである一方、やわらかく、またべとつくような粘土質であるとの報告もありました。これは、着陸事件がようやく夜が明け、霜が溶け出して日のあつた表面だけかわいて、日蔭や土中にはまだ水分が残っているような状態であったと推測されます。飛行士が実際月面を歩いている様子を後に映画で見ましたが、歩み進むとき上がったカカトには、土がベトベト付いて、ちょうど少し固めのどろんこの中を長グツで歩いているような状態でした。それでいてバタバタ走るとホコリが上がるのです。

船外活動の最初の方でコンラッドは

「・・・何だか足が下にくっつくような感じだ」といっています。着陸船の近くはビーンがいつているように「・・・表面はとてもなめらかで、ホコリもあまりない」状態でした。またやわらかく「・・・もしかしたら、月面は固くないかもしれない。固さが感じられ

ないのだ。どこにでも転んでしまうような気がする」というようでした。また粘土のようであったという事は「土に打ち込んだ地中標本採取管を引き抜いても、まわりの土はあまり跡の穴の中にくずれない。みぞを掘っても、まわりのカベはくずれなかった」という事実が証明しています。

またこの粘着性を水に原因を求めますと、地表にわずかばかりの水流の跡を発見できます。通信の会話では

「月着陸船から斜めに浅い堀のような跡が走っている」といっています。状況は次のようなものでした。―着陸地点付近には巾一・五―三ミリ、高さ一・五ミリほどの細い筋が走り、クレーターの中へ通じていた。月面には、筋や雨だれのような跡のある比較的固い所、シャープ・クレーターのそばのように土の細かいやわらかい所、サーベイヤー・クレーターのようなもの、粒子の細かい所の三つのタイプがあった。またクレーターの底に何か溶けたようなものがあった（ヒューストンIIコンラッド、ビーンの記者会見）―

これはまさしく水の流れた跡と溶けたドロと推測されます。粒子の細かい所は水が早く地下に流れ、かわきやすく、固い土ほど粘着性が残るといことになります。しかしここでは雨が大幅下降したというようなものではないと思われます。それは、サーベイヤーの足跡がほとんどくずれ残っていたからです。あるいは粘土が堅く固まってしまっていたのかもしれない。

このように水と大気（酸素）の存在の可能性が考えられますと、サーベイヤーの部品の次の変化の状態が説明されます。

「コンラッドIIサーベイヤー3号の電線の一部を切り取る。電線をいま引っぱるところだ。」

ビーンIIよく切れた。

コンラッドII材質がもろくなっていたのかな。簡単によく切れるよ。取れた・・・」

これは後の記者会見で次のように説明されています。―サーベイヤーのアルミニウムの管や配電線の金属は結晶化が進んでいるように、地上で考えていたより案に切り取ることができた！。

そこでこの結晶化によって、金属がもろくなるとはいったいどういう現象でしょうか。それは「サビ」なのです。

大気や水があるからこそ、酸化現象としての「サビ」が考えられるわけであります。こうなってきましたと、実にゆゆしき問題であります。さらにその後報導されている情報によれば、岩石の中にはリンや硫黄のような揮発成分が発見されています。これらは昼間C一三〇度にもなる月面では、すぐ真空中に逃げ出してしまうものだと思います。また月の石の半分は酸素でできていることが判明しています。もちろん鉄やアルミとの酸化物としてです。実に、微量のチタンや鉄の存在が疑がれて、この酸素の存在が無視されているのは意外です。

岩石の形成過程も、ハワイのキラウエアの溶岩と似た一〇四〇度から一〇〇度くらいの温度で固まり、熱的によく絶縁された中（真空中ではないの意）で、ゆっくりと冷えて固まったことを示しているといわれ、それは、水素、水、炭酸ガスなど揮発性の物質のたぐさん（一気圧程度）ある所でできたと考えられること、月物質予備研究チームのデビット・ウォーレンズ博士や小沼直樹分析化学研究員等がいつています。

その他、種々の報告がなされていますが、今後の解明に期待した

いと思いません。ただ月の岩石にも土にも水が全くなかったと報告されていますが、これも当局の態度からしてあやしいのです。アメリカではすでに岩石から水や酸素を作り出していているといい、また、月面物質を積み込んで地球に帰るとき、11号の場合と同様、船内の湿度が高くなっていました。帰途は月の水による湿気と乾いてたどるホコリに悩まされどおしだったのです。

「エンラッド」予想してはいたが、船内の湿気は相当なものだ。船内に月のホコリが漂っていて鼻がくすぐったくなったため、昨夜もやっただが、今朝もあちこちふき掃除をしなければならなかった」

水分を含んだ土がついている機械や標本を積み込んだ狭い船室内は、そんなふうになるに違いありません。

月面上における生物について調査されたかどうかですが、実はサーベイヤーの二年七か月放置された足に、地球からバクテリアを入れたチューブが取り付けてあり、これがいま回収されています。この実験では当然この微生物は月面空間に触れており、いわゆる外気にあてられたものと思われまます。また温度変化の激しいとされる月面の昼夜を何度も通っているわけで、この結果がどうであったか関心もたれると同時に、この実験をした意図というものが問題になってきます。すなわち、月面で生物の存在が可能と思われるからこそ、行なわれたのではないかということです。月の土が後に実験されたところによれば、植物の成育を早めるということですが、これは、非常に肥えているということの意味すると共に、月でのその可能性をも示すことになりましよう。

最近アメリカ空軍の円盤調査機関であるブルー・ブック計画が中止され、UFOの存在を否定したといわれますが、これはだいたい最初から円盤をもみ消すために計画されたようなもので、当局がこの宇宙問題をやっつきになっておおい隠そうとしている姿以外の何ものでもありません。月探査も当初から同様のことがいえるのであって、このアポロシリーズでも、一回として、撮影フィルムを置き忘れたり、カメラがこわれたりしなかったことがありません。必ずいいわけがましくトラブルを起こして、特に重要な写真、逆にいえば、一般公開はさしつかえるというようなものが強調されているようなのです。

地球が宇宙に開国されるためには、地球人類がその資格を得ることが必要とされるのでありましよう。事実が解明されるに伴い、私達は一步一步それに近づいていっているのです。金星、火星、木星、土星・・・まだまだ先はあります。地上がその世界を一日も早く受け入れられる日が来ることを・・・。

タイプライターと
軽印刷機材の店

ニッケイ事務機商社
ニッケイ事務機商社
ニッケイ事務機商社
ニッケイ事務機商社

— 経営者金森利通氏の驚くべき親切さとサービスに感ぜられる — H. 久保田

東京都台東区西浅草2-25-7
電話(843)5731-5038

フランスに着陸した

U F O 軍人

ジョエル・ムスナール

現在六十才になる一人の男が、十年前に一機の空飛ぶ円盤から出てきた人間が短時間姿を現わした光景の唯一の目撃者であつたらしい。

質素な暮らしをしているジャルマン・ティシー氏は初等教育しか受けない人だが、それにもかかわらず心中にきわめて鮮明に残っている体験の思い出について実に正確な説明を榮々としてくれた。彼は人生において何度も危険に遭遇した人である——彼のすぐれた肉体的な力が大変なものであるのと同じほどに大変な危険に遭遇したのだ（彼が一九四〇年に、八名の将校と二名の下士官兵から成るフランス空軍の特殊小隊の隊員として選ばれたのは、この個人的特徴のためである）。

こういうわけでティシー氏はがっちりした恐れを知らぬタイプの人である。

彼の率直さと正直は自明であり、また自分を正確に表現する注意力が相当なものであることも自明である。話をでっちあげようなどではないことは全く明らかで、彼の望みは目撃した事件を見たところ、正確に簡単に直接に述べることにある。そのことで有名になるうとは決して思わなかつた。周囲のだれに体験を話しても信じては

くれないだろうし、至る所で嘲笑の的になるだけだということの本能的に感じたので、実際は十年間にその体験については四名の人（妻、息子、息子の嫁、職場の一同僚）に話しただけである。狂人の夢想家とみなされるのを極端にいやがっていたが、それでもだれかまじめな研究者が見つかれば、その不思議な体験は相手の興味を引くだろうと確信し続けていた。何年ものあいだだれに頼ればよいか迷っていたが、ついに或る日G E P A（注：フランスの円盤研究会の略称）の存在について新聞で読んだのである。

事件は一九六〇年の四月または五月上旬の夜間に発生した。ティシー氏はその当時フランスのビュイドーム県の或る村で製パン屋をやっていた。問題の夜は毎夜のとおり村の高台近くにあるパン製造所で生パンをこねる仕事をしていた。その場所の最も高い建築物——村の教会——が近くにあり、以前には定期市に用いられた大きな坂の広場をへだててパン製造所と離れている（目撃者のちよつとしたブライヴァシーを保つために、村の名は洩らさないことにしよう）。

事件

朝の二時頃だった。彼が生パンの仕事で動き続けていたとき、突然異様な音を聞くとともにあらゆる種類の色彩が窓越しに製パン所の中へ輝いた。数秒後に彼は外へ出た。ドアはすでにあけてあつたからだ。すると前方、古い定期市広場のまん中に、彼の所からは上り坂で教会の下の所に、一個の巨大な物体が地上に立っていた。この物体の下に機台があつたが、これを彼はアコーディオンのジャ

バラにたどえている。この物が左側に（坂の下り側を主にして）伸び始めたので、その大きな物体は——最初は坂の地面と同じく傾いた姿勢で横たわっていたが——今や水平な姿勢になった。彼は物体から出てくる強い騒音の中に或る金属的な音が鋭く割り込んでくるのを聞いた。するとハシゴが物体の右手から降ろされた。

きわめてからだの小さな人間らしい姿をした生きものがハシゴの三段を降りて地面におり立ち、パン工場よりも目撃者の少し右よりの方向へ歩き始めた。一方、一種のホンモノの竜巻が物体から吹いてくる。いわば強烈な風で、温かくて刺激の強い風であることが主として彼の左ほおで感じられる。どうやら機体かその一部が反時計方向に廻っていることを示すらしい。

ジャルマン・ティシーはすぐに大変な物を見ていることに気づいて、直ちに空飛ぶ円盤に関する有名な話を思い出した。それについては数年前に新聞に多くの記事が載っていたのだ。どういふ態度をとるかをきめるのに全くためらうことはなく、物体からの強風にもめげず——それは全く障害となったが——相手を捕えてやろうという強い意志を起こして侵入者の方へまっすぐに歩き始めた。「その小僧を捕えようと思ったんだ」

怪人の様子

彼が小人だというその生きものは、よく均整がとれて、実際すてきな身なりだった。小さな長グツ、びったりと身についたズボン、前側でボタンのかかった一種の薄緑色のジャケツ、同色のヘルメツトなどを身に着けている。怪人の右端にはまがった剣のサヤの如き

物がつり下がっていて、そのツカははつきりと見える。この細部は（大気圏外からの訪問者といってもあまり安心はできない——だが地球の宇宙飛行士だってほとんどみな軍人ではないか）ティシー氏を全然おびやかしてはせず、小人の方へ進み続けた。ところが小人が彼を認めるや否や長いチューブを彼の方に向けた。……「消防士のトーチのようなチューブだ」とティシー氏はいう。このチューブが強烈な光線を放射してティシー氏の胸と頭にあたったら、突然彼は全く呼吸困難になった。すでに左ほおを打つ熱い風でめまいがしているのに、今度はこの光線で目がくらみ、両肺がほとんどマヒしたように感じるのだ。思わず顔に両手をあてて頭を下げたまま怪人の方へ前進を続けた。

このときパン屋が顔や両腕を紛だらけにしてまっすぐに前進する光景に相手は恐れをなしたのだらうか。とにかく怪人は廻れ右をしてハシゴの方へもどり、円盤の内部へ消えてしまった。アツという間に小さなハシゴも消えて、金属のドアに大きな太矢が放たれると発するドカンという音、のような金属的な音をたてた。急速に物体は三十メートルばかりの高さに垂直に上昇してヒューッという音を出し始めると、やや波状の水平飛行で南方へ急スピードで飛び去った。月光によってティシー氏はこの物体が空中にいた似たような物体群と合流して、その後全機が一緒に飛び去るのを見た。

物体

ティシー氏の話は全く正確である。物体の全体的な形は子供の回転コマに似ていて、巾は十ないし十五メートル、高さは五メートル

あり、コマの心棒にあたる所に一連のジャバラ装置があった。物体から少し下り坂の所にいたため、目撃者はその上部がよく見えなかったが、上半分と下半分は全く異なることを完全に知ることができた。上半分は透明な面で成っているらしく、急回転しており、その表面に四列の固定された光る管があつて、各管は約五十センチの長さで、ネオン管に似て、互いに長さ等しい距離をおいて取り付けてある。一列は黄色で、次が赤、三列目は青だ。この光る管の配列によって機体の周囲に多彩の光の波ができていた。

怪人の外観

小人の顔は人間の顔付きをしていたが、機体から出る強い風と光線のために妨げられて、顔の細部またはその表情を見ることはできなかった。

小人のヘルメットはツバとアゴヒモの付いた消防士のヘルメットのようなものだ。小さな怪人は表面に四つの箱のついたベルトを付けていたが、その箱をティシー氏は弾薬ごととみた。彼はこの弾薬ごとが符合する鉄砲を見なかったことに驚きさえした。もっとも、拳銃を携帯する円盤パイロットが出現するとしたら、ちよつとしたオドロキだ。ただしその意味ですでに一つの報告があるけれども——（一九五四年のユジヴァリ氏の目撃談）。その他、宇宙人がベルト上に小箱を着けていたと数例が報じている。

小人に関するティシー氏の話で最も奇怪かつ可愛らしくない部分は、怪人の右腰につられていた、ツカ付きのまがった剣のサヤである。だが目撃者が考えるようにほんとは剣だったのだろうか？ 今

日われわれにとってコン棒や古代の投石器や十七、八世紀の筒先の太い銃が役に立たないのと同様に、剣はもはやさほどの軍事価値を持たないものだが、それでもまだ世界中の軍隊で象徴的な——人は飾り物だといふかもしれない——価値を持っている。あるいは小人は正装の軍服を着ていたのだろうか？

注 釈

実際に剣だったとしても、奇怪な小人軍人はティシー氏の接近から自分を守るためにそれを使用する必要はなかった（ティシー氏の意図は必ずしも親切の上なものではなかった！）。なぜならその地球人の接近を妨げるには、右手に持っているチューブを用いればよかつたからだ。白色の光線は輪郭が鋭くて目がくらむほどで、目ざわりだったという。ここでもしばしば報告されてきた非分散性光線と関係があるようだ。「その光線は完全な直線だった。光は散らなかつた」と氏はいう。この光は彼を窒息させたが、ほんとうのマヒを起こしたのではない。彼は両手で顔を防ぎ、歩き続けることさえできたからだ。

この事件の或る特徴（複数）は他の円盤目撃を思い出させる。物体周囲の旋風効果は特にプレマノンで見られた跡を思い起こさせる。ここでは草が円形状にベシヤンコになっていた。怪人の様子はドゥシェー夫人が伝えた話と比較してよい。彼女は一九五三年九月四日にフランスのヨンヌ県のトネルにおける着陸事件の唯一の目撃者であつた。

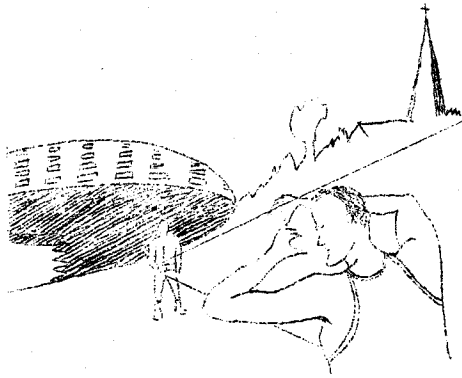
騒音や光線があつたにもかかわらず、着陸の目撃者がただ一人し

かなかったという事実を語るに足る短時間（三、四分間）。それ
地方の、同県中で人口の希薄な地帯であること。夜の遅い時刻であ
ること等々。

物体が発した騒音に関しては——地上にいたときでさえ——的確
な意見を出すのはむづかしい。ティシー氏はそれを説明するのに困
惑したが、列車が発するときに出る音に似た「ゴ—ッ」という言
葉を用いて話し終えた。だがその音は切れ目のない連続的なものに
思われたという。

翌朝彼は着陸地点を検査したが、重要なシルシは見あたらなかっ
た。その草がただわずかにつぶれているだけだった。

彼は奇怪な体験のために不快感をもよおすことはなかった。現在
はきわめて健康である。ただ一つ残念なのは、小人野郎を捕える
ことができなかったことだ。



フランスの円盤誌「フェノメヌ・スパシオ」
に掲載されたスケッチの写し。



宮内温夫の入選作

昨年秋の号外でお知らせしたとおり、日本GAP幹部で
商業美術家の宮内温夫は、昨年度日宣美展にジョージ・ア
ダムスキー講演ポスター「生命の科学」「死と空間を超え
て」の二点を出品し、前者が準入選、後者が入選の栄に輝
いた。同君は毎年同展に入選する若手ホープで、アンリ・
ルソーを思わせる幻想と神秘感に満ちた作風は本邦商業美
術界でも高く評価されており、外人画商なども注目し始め
たため、本年四月二十四日羽田発にて同じく日本GAPの
詩人古山清久君と共にカナダへ美術修業に旅立つことにな
った。本会はあげてその前途を祝福し、両君の御成功を祈
るものである。在カ中には米國へも行き、GAPの要人達
に会うとのこと、いずれその報告類を本誌に掲載するので期待され
たい。写真は上が「生命の科学」、下が「死と空間を超えて」で、
カラーでないのが残念だが、原画はすばらしい色彩で圧迫的な迫力
に満ちている。このカラー写真を御希望の方は一枚につき送料共百
円を（いずれか指定の上）同封（切手は不可編者宛申込まない）。

ルーマニアに出現した円盤

フローリン・ゲオルギータ

私はここに未知の飛行体のすばらしい目撃事件の一つを述べたいと思う。というのはその記録写真（複写）が、この画期的な問題に関して多年たぐわえてきたウン蓄を更に深めるのに役立つところからである。

その事件というのは一九六八年の夏の終りに近い頃ルーマニアはクルジュの町の郊外で撮影されたUFOのそれである。その写真類はこれまでに世界で撮影された最良かつ最も興味深いものに入る。まず始めに、この写真類の分析によりきわめて著しい科学的な問題が生じた事実について特別に注意を喚起したい。これに関する解釈は後に試みるつもりだが、これは後日により詳細な分析に役立つかもしれない。だがまず事実、事実。

事件の詳細

一九六八年八月十八日の朝、技師のE・BはガールフレンドのZ・Mと他の二人の友人と共に町の騒音を遠く離れて楽しい日曜日をすごすことにきめていた。天気は良好、空は晴れているので、一同はバクジュの森へ行くことにした。この森はクルジュの西方に位置する丘（複写）を覆っていて、草木が豊富なためにいつも、自然を愛する人に大きな喜びを与えていた。

正午頃人通りの多いルートから遠く離れた花一ぱいの開拓地に落ちついた。テントを張って空腹を感じたので、小さなたき火をして食事の準備をする。E・Bがマキを取りに行くことになった。森の中へ十歩かそこら踏み込んだとき、ガールフレンドが奇妙な物を見せるわよと彼に呼びかけている声を聞いた。開拓地へ引き返すと空を見ろという。驚いたことに一個の円い金属の物体がいきなり見えた。日光を受けて銀色に見える。全然無音で、しかも奇妙なやり方で森の上空を飛んでいるのだ。

E・Bは十秒間だまってそれを見つめたが、いち早く大変な物だと気づいて、草の上にしいてある毛布の所へカメラを取りにすつ飛んだ。大急ぎでシャッタースピードと絞りをきめてからボタンを押す。二枚目は物体がもっとゆっくり動いたので落ち着いて撮った。こうして彼は物体が飛行の進路を逆にしたこととその光度が変わったのを観察する余裕があった。その詳細は写真によく示されている。再度急いでおわりの二枚を撮る必要があった。物体が突然加速して急上昇し、急速に視界から消えていったからだ。時刻は午後一時二十三分。風はそよとも吹かず、森の小鳥たちの歌声以外、自然界の静寂は続く。

一同全員はわけのわからぬ物体の奇妙な運動を見つめながらだまって立っていた。だが物体が去ってしまうと、食事の準備やそれに続くハイキングの楽しさでみな宇頂天になってしまい、物体が飛ぶのを見ていた二分間に与えられた強い印象は次第に消えてしまった。帰毛してからE・Bは日常の諸問題にとりまかれて森の出来事のことにはもう考えなかった。フィルムがなくなるまで他の写真を撮ったりして、十日後にはもうフィルムを現像した。だが実際には現像

を急いではいなかった。嘲笑を恐れて、写真をどう処置すればよいかわからなかったからだ。彼の友人中で目撃物に関して教えてやるのは私だけである。当時私は二カ月間ブカレストへ行っていたので、八月二十六日にやっとクルジュへ帰ってきた。こうして九月一日後に写真の最初の印画を見ることができたのだが、おそろしく重大な物であることに気づいた。

調 査

四十五才になるE・Bは少々自己中心型だが、仲間にはまじめな正直な人間で通っている。若い頃は将校だったが、今はクルジュの建設会社の技師だ。この地位にあるあいだ私はほぼ二年間彼を知ってきたが、二人の関係は純然たる職業上のものである。UFO問題が彼に興味を起こさせないこと、UFOすべてを疑惑の目で見ていたことなどを私はたまたま知っていたし、クルジュには彼が参考にしようなUFO関係の文献資料も書物もないことを確実に知っていた。また新聞にたまに出るUFO記事なども彼には関心の対象にならないことがわかっていた。

三十四才で、或る家庭のお手伝いをしているガールフレンドのZ・Mも、仲間のあいだではまじめな人でおっているし、UFOには興味のない女性であることもわかっていた。

私は目撃者たちに質問を始めて、次のような詳細を更知った。

— 写真が撮られた開拓地はクルジュから直線距離で四十七キロあり、町の西南西の方向にあたる。

— 戸外の温度は約C三十六度だった。

— 空は完全に晴れていたが、非常に高空に奇妙なモヤがあり、物体が高空に消えたときに見えただけだった。

— カメラはFED II型、インタースター28レンズ付。フィルムは普通のものでDIN 17（注IIこのカメラはソ連製35ミリ中級品。DINは露光指数で17はASA 40に相当し、国産フィルムのS級とF級の中間になる）。

— 物体が到着した瞬間にはだれもそれを見なかった。開拓地の上空に来たときに目撃されたのである。

— 目撃されたとき、地平線に八十五度の角度で、約六百メートルと思われる高さにあった。

— 最初の一運動の飛行コースは北東から南西にかけてで、直線コースだった。次に物体がコースを逆に変えたとき、その移動コースはやや下方の地面に向かっていった。

— 飛行中位置を変えるときに水平になったり垂直になったりして飛行コースに対して物体自体の姿勢を変え続けた。

— その外観に関してはE・Bが私にくれた筆記説明文を再録する。これは数種類の新聞に掲載された。「物体は金属的を輝きを帯びて、音はなかった。常に姿勢と方向を変えた。私はこれまでに気球からジェット機に至るまで飛んでいる物をずいぶん見たが、そのどれにも全然似ていなかった」

— 物体の径は三十メートル以上あるように思われた。

以上のすべてはきわめて興味深いが、インチキでないことを確かめる必要があるので、クルジュで最もよく知られている写真記者のところへまずフィルムと印画を持参した。研究室でそれらを検査し

たあと、それがホンモノであることに疑いはないと記者はいう。

次にブカレストの高名な専門家でルー・マニア・ナシヨナル・プレス・エイジェンシーの写真記者に相談した。本人は他の用件でたまにクルジュに来ていたのである。彼は全くインチキでないことを確証して、面白い心理的な一面を指摘した。つまりE・Bのような素人写真家がインチキをやるうとすれば、物体を画面の中心に置いたかもしれないというのだ。しかし第一枚目（注||表紙写真）と三枚目の写真には物体はほとんど端にあり、そのことは彼の興奮状態や、撮影するのにあわてていたことを示すものである。

私はフィルムについてクルジュの或る公立研究所にも尋ねてみた。すると最新式の方法を用いて同所の技術陣に分析させたが、トリックの跡は発見できなかった。

こうしたきびしい技術検査の後、私は写真を引き伸ばすことによって各種の線の動きの妥当性を見つけ出そうと思った。まず始めに、二枚目の写真がその鮮明を遠近感によって特に私の注意を引いた。自然の風景と、森の上空を飛ぶUFOを実に鮮明に示している。三枚目もこのような高度に同じ物体を投げ上げるのが不可能なことははっきりと示していた。しかもそのすべてが同一物体であることと非常に大きな物であることが写真からはっきりとわかるのだ。

写真中の同じ樹木と同じ花などを見れば飛行の跡をたどることができる。掲載のスケッチは各写真を重ね焼きして簡単に作る事ができた。

スケッチ

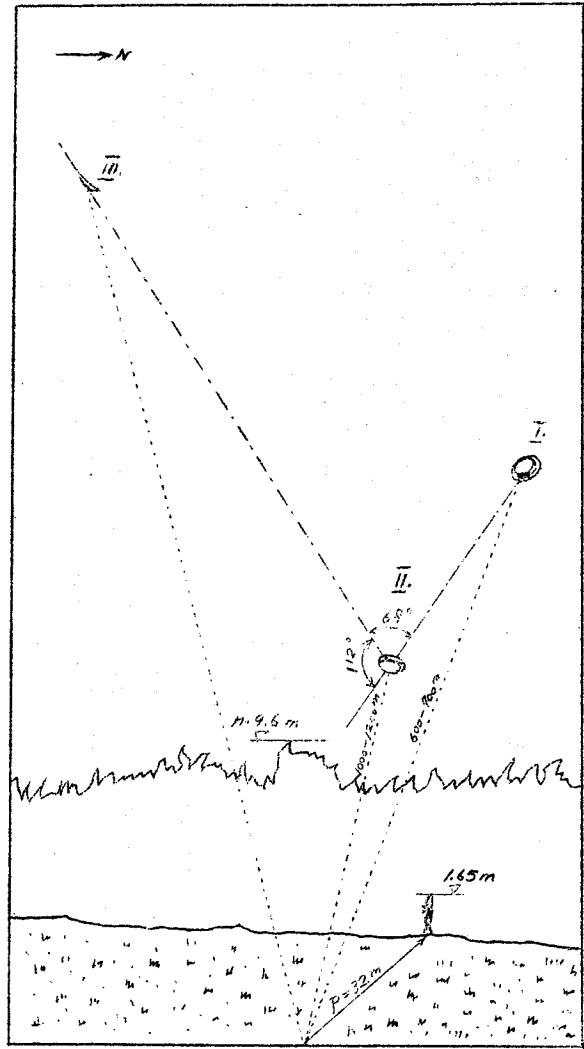
写真 2



写真 3



また、樹木、枝、花などの大きさを見れば物体の巨大なサイズを判断することもできる。直径約三十メートルというE・Bの見積りは正しいようだ。種々の点における幾何学的な細部により、この見積りは実際には最少限であることがわかる。最後に、第四枚目の写真中の同じ樹木の存在は（この四枚目は特殊な性質のためにE・Bが保管したまま公開されない）、フィルム上の写真がホンモノであることを明確に示している。つまり上方へ消えてゆく物体の最後の細部でわかるのだ！



て、二人の男が酷似した不思議なUFOの姿をフィルム上に捕えたのである。この二人が互いに知り合っていたとか、互いに交際していたという可能性は全くない。実際二番目の男は最初の男（サンタアナ写真の撮影者）の写した写真について何の知識も持たなかったのだ。

（筆者ゲオルギータ注）私がきわめて残念なのは、コンドン委員会の発行した例の否定的な「コンドン報告」の筆者たちは、このク

この写真類と他の類似のUFO写真類との試験的な比較が、私にとって最後のな証明であった。フランク・エドワーズの著書「空飛ぶ円盤—重大問題」は、一九六五年八月にケアリフォルニアのサンタアナ付近で撮られた一UFOの三枚の写真を掲げているが、それらはこのクルジュ写真に驚くほどよく似ている。同じ型式による構造、同じ比率、同じ金属的構造らしさ、同じ技術的特徴等ただ大きさだけははっきりと異なるようだ。こうして大体に三年間のズレを置いて（サンタアナ写真は八月三日に撮られ、クルジュ写真は八月十八日に写された）、互いに一万六千キロメートル以上の距離をへだて

ルジュニ写真の公開について言及しなかったことである。同委員会の写真検査専門家ウィリアム・K・ハートマンは次のように書いている。「写真による証拠は、多数の写真ばかりでなく多数の撮影者をも必要とする。その場合、互いに関連のない未知の者同士で、かなりの距離をへだてていて——数十キロも離れているのが望ましい——、しかも互いの写真が同一のUFOを示しているのがよい。コロラド大学の計画——コンドン委員会——はこのような実例に出くわしていない」ハートマン氏がまじめな人物で、クルジュニ写真について知っていたならば、まさかこんなことを書きはしなかったろう。それともこのクルジュニ事件で考えを変えらるうか？AFSR編集長C・ボウエン注IIにが変えるものかI-V」

(編者注IIコンドン委員会というのは米空軍の委嘱により編成されたコロラド大学のコンドン博士を中心とするUFO調査団で、ほり大な資金と労力を費して調査研究した結果、UFOは存在しないという報告を出して、世界の円盤研究家たちから逆に嘲笑の的になった。空軍が政府の政略的な陰謀によるとも考えられるが真相は不明)

証拠は絶対的なので、私は写真類を新聞社へ送って掲載を依頼した(この件におけるわれわれのまじめさを示すために、E・Bも私も写真に対する物質的な報酬は全然求めなかったし、受け取ってもいないことを、ここで明確にしたい)。

写真の公開

厳密な分析の後、一九六八年九月十九日付のブカレストの新聞すべてとクルジュニの二種類の新聞が写真を掲載した。同日夕方には全ルーマニアのテレビ網が拡大写真を放映した。翌日には或るテレビ局の一団が早くもクルジュニへやって来て、E・BとガールフレンドのZ・Mとのインタヴューが次の日の夕方そのテレビで放映された。インフォルマティア・ブクレストイウルイ紙が、E・Bのすぐれた観察力について一記者が行なった心理テストの記事を掲げたところにつけ加えておくのも面白いだろう。

しかし、もちろん、いつものとおり敵意を示す人々もいた。だがまた例によって研究態度が主観的で、事件の事実を傍証しない人々もいた。こうして、写真を見ないで地元の天文台長は、写真中の物体はたぶん気象観測気球だろうという見解を発表した。大きな新聞に掲載された二、三の記事で、私はこの憶測の弱さを指摘したが、これは明らかに問題にならないものである。

写真の分析

私としてはクルジュニの一連の写真は、記録的な面と、それらが示す科学技術的な面との両方からみて、きわめて重要なものだと思う。同時に、世界で起こった何万ものUFO目撃と並んで、このクルジュニ写真は現代科学界に同じ基本的な問題を投げかけるようになってきた。すなわち、この完全な機械がどのようにして作られるのか、航行するための不可思議な技術はどのようなものか、用いられるパワーは何なのか、乗っている人々はだれなのか、製作者はだれなのか、という問題である。

見たところこれらの問題には目下解答が見出せないが、あらゆる目撃、あらゆる写真、あらゆる物的証拠のものと徹底的な分析をやらねば、重要な情報が得られるだろう。

さてこのクルジュ写真に何が発見できたか？

(A) 写真1(表紙写真)はすでによく知られている一つの事柄を確証するよう思われる。すなわち、いわゆる空飛ぶ円盤は賞賛すべき技術的原理に従って作られた金属の航空機であるということだ。たとえばこの例に見られるように、航空力学に対する円盤の留意は明白である。

写真1が撮られた角度は円盤の上部の光景を見せている(この特殊なタイプのUFOが最初である)——それは平たい。よく見るとその円盤の表面は完全に滑らかでないことがわかる。左側にわずかなふくらみがあるのだ。この非対称デザインの目的が何なのかを想像するのは困難だが、フランク・エドワーズが著書で述べた数種類の事件を思い出させるのに役立つというものだ——円盤の乗員が上部表面の或る種の利用をしているのが見られたという事件類である。

この円盤にもケアリフォルニア円盤(サンタアナのもの)にも、側面に舷窓が見えなかったという事実は、内部から外部への透視的観測装置の可能性に関する重要な問題を提起する。この特殊な型の宇宙船は単なる遠隔操縦によるもので、そのため観察などを必要としないのだろうか？ しかし物体のかなりな大きさを見れば単なる遠隔操縦ではないという推論に至る。内部の広い空間を使用する乗員はいないのか？ だが内部に人間の存在を認めるとすれば、何らかの観察装置がなければならぬ。写真中には見えない何か特殊な装置を持っているのだろうか？ 当然この問題はもっと徹底的な調

査と、加うるにもっと詳細な写真資料及び直接目撃等が必要とする。(B) しかし写真2は最も重要な問題を提起する。まず私の注意は次のような種々の異なる様相に引かれた。

——第一に最初の写真と比較すると、物体の形はややぼんやりしていることに気づく。一方写真中の他の細部(樹木、花等)はきわめて鮮明に出ているのだ。しかも最初の写真が撮られてから経過した数秒間に、空気の状態もカメラの操作に関する状態も全然変化してはいない。

——次に、物体の像は明るく輝いていて、しかも同時に、フチの上部の構造上の細部によってついでにらしい影は、写真1にできている影と比較するとほとんど不合理のように思われることに気づくのである。

こうした変化について私が後に発した質問類に答えてE・Bは次のようにいう。二度目の写真を撮る準備をしていたとき、彼は物体が次第に強く輝きながら空中でコースを逆転して、ついに突然加速したかと思うと急上昇した様子を見ることができた。

われわれはUFOの外面の光輝、特に夜間のそれに関する無数の記事を知っている。これがこの事件で発生している事柄なのだろうか？

この疑問を解くための助けを求めて、私はクルジュ美術院の二名の大学講師に別個に訴えた。二人共自然光の問題に関する専門家である。その内の一人の援助によって同院の教授団の面前でわれわれはフィルム全体と個々の写真とをスクリーン上に映写した。討論の後、二人の専門家のいずれも物体の模型を作った。この模型に対して彼らは側面の光源(ここでは日光の一部)から光をあてて検査し

た。別々に出た二人の結論は一致していた。すなわち写真2の物体はたしかに輝いていたが、それ自体が輝いたのであって、外部の光で輝いたのではないという事実である。

UFOが持つ光輝の問題はたしかに著しく科学的、技術的な問題である。いったいどのようにしてかくも巨大な金属の表面が突然光輝を帯びるようになり、しかも夏の日の白昼に太陽光よりも強く輝くのか？ この現象の目的は何なのか？

しかしフチの上部に見える影もかなりの問題を提起する。それは単に空中を物体が逆転したための、そしてフチにあたる太陽光線の角度のための、瞬間的な結果にすぎないのだろうか？ それとも写真1のドームのうしろに隠れている、そして今や影の部分として見えるようになった構造上の細部ののだろうか？ 物体が作られている金属材料に何かの同質性が欠けているのか、それが光輝現象が発生するとき目立つのだろうか？

もっと現実的な憶測に到達するためには、まず光源と、それに実際にこの光輝の奇妙な放射の目的とを知らねばならない。

UFOの光輝現象——これは自著にUFO目撃事件をあげてUFOの重要性を書いた著者連がほとんど問題にしていないのだが——は、一方ではほとんどいつも科学的には不可能事としてこの奇妙な物体の存在を否定するために多くの人が利用してきた特徴の一つとしてあげられてきた。

この見地からして、クルージュで撮られた写真は最重要な一連の証拠物件となるものである。というのはここではこの現象は——こんな事件はいつでもそうだが——空中の単なる光点として出現するのみならず、物体の外形輪郭が依然として見える瞬間にカメラに捕え

られたからだ。この事実は主観的な解釈の可能性またはインチキとして早計に却下する可能性をしりぞけるものである。

(○)さほど見ものではない写真3は、それでも重要な問題を投げかけており、これは未来の新しい航空技術のために基本的なテーマとなるようにも思われる。しかし読者をうんざりさせないようにするために、その問題点の二、三をあげるにとどめて、全体的な論議は将来の機会に再度取り上げられるにまかせよう。

まずこの写真3で目につくのは、物体のほとんど垂直な姿勢である。これは納得のゆくことだろうか？ われわれは実際航空機にもUFOにも水平な姿勢で飛ぶものだという概念に慣れているが、しばしば飛行家は——特に戦闘機のパイロットは——有利となる場合は、ときとして機体を垂直にする必要もあることを忘れてはならない。

しかも無数のUFO目撃のなかに、UFOが垂直の姿勢で動きまわったり、または垂直で停止したという報告をわれわれはよく知っている。そこでたとえば、一九六六年四月二日にメルボルンで撮影されてフランク・エドワーズの著書「現代の空飛ぶ円盤」に掲載された写真を私は思い出す。たしかにこのような姿勢は機体内の乗員に大きな不便を与えるようにも思われるが、結局彼らにはさほどのことでもないのだろう。

だが写真3は興味深い一つの細部を示している。つまりUFOの像の上部に奇妙なわん曲部が見えるのだ。これは写真2の——説明困難だが——影と何かの関係があるのか？ この細部の分析はフチの色と共に——ドームよりも強く輝いている——後日再び取り上げる価値のある問題である。

$$h = m + n$$

$$m = 0.35h$$

$$n = 0.65h$$

$$d = 0.1H$$

$$\tan \alpha = \frac{h}{p} = 0.3$$

$$\alpha = 17^\circ$$

$$\hat{\alpha} = \hat{\alpha} + \hat{\beta}$$

$$\hat{\alpha} \approx 0.65 \hat{\beta}$$

$$\hat{\beta} = 20^\circ 40'$$

$$H = D \sin \hat{\beta}$$

$$D_1 = 1000 \text{ m}$$

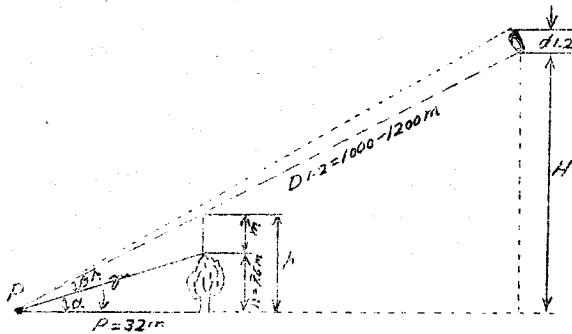
$$D_2 = 1200 \text{ m}$$

$$H_1 = 1000 \times 0.318 = 318 \text{ m}$$

$$H_2 = 1200 \times 0.318 = 382 \text{ m}$$

$$d_1 \approx 32 \text{ m}$$

$$d_2 \approx 38 \text{ m}$$



(D) 結論として、ルーマニア、クルジュの町の郊外のパシウ森林上空で撮られた不思議な物体の三枚の写真は、UFOの実在とその大変な科学的重要性に関して重大な証拠となるものである。徹底的な検査と確証の後に確立された写真フィルムの実在性は、UFO問題を否定的するかまたは無視しようとする試みのすべてが、現代と未来の科学の基本的な概念に対して遺憾な態度を示すものだ。

以上三枚の写真の提供は、その中に含まれる多量の資料の或る面と共に、もっと徹底的に研究しようとする人々にとって生きた刺激となることを望む。この写真類の記録の重要性は正しい科学技術的な研究によって更に増大するであろう。

テレパシーの体験

高原光夫

テレパシーの能力の発現は頭部を中心としたケガが原因となる場合が多いようです。私自身年少の頃、三回頭頂部を打撲しました。一回目は短時間の言語障害、二回目は短時間気絶後二時間程度の記憶障害、三回目は裂傷です。以後その個所が何となく痛むことがよくありましたが、最近は何となくありません。ただ小さい頃、新しい考えを導入するとその瞬間、頭に一撃くらったような感じがよく起こったのを覚えています。この点はアダムスキー氏が「生命の科学講座」の中で触れています。

しかしこれらのショックがもとで私にテレ能力が現われたのかどうかはわかりません。その自覚に五年以上のギャップがあるからです。自覚し始めたのは中学時代です。ある教師及び同級生と非常に親密に交際していると次第に相手が口を開く寸前に何を言うかがその言葉通りにわかるようになったのです。授業中例の教師が口をきくより早くその内容がわかってしまうので、それに応じたジョークなどが寸断なく交され、注意深い友人を驚かせました。ここまでの話ではそれは単なる慣れだと言われます。しかし今度は私が思っていることを言わず、ただ強烈にその思念を友人に向けると、その人がその通りに話すのです。おもしろくなつた私はよくこれを試みしましたし、現在も行なっています。割合成果があるのです。当時の私は心が非常に落ちついていて、次の瞬間に起こることが印象でわ

かりました。ちょうど走る車窓からすぐ外を見てみると矢継早にさまざまな景色が目に入ってくる、そんな感じですよ。短い時は直前、長い時は何年前にも及ぶ印象がありました。こんな時は自分が生き生きしているのがわかります。ですから私には高橋忠春氏のようなリーダーマンの存在がわかります。とは言っても、私の関心はそれ程広くはないので到底高橋氏には至りませんが。

ところで中学時代なから高校時代の末までは心はひどく消沈してしまい、この能力の応用など忘れてしまいました。この時期には自分が多くの矛盾を持つ存在（現在もそうですが）であるにもかかわらず、生徒会活動を通じて現教育制度や、教師、親、おとな達の理解力の乏しさに失望していたのです。

その後、高校時代の末にもいろいろ体験をしました。ある時、帰宅中にすぐ上空を何かが輝っていて、それが軽やかな音楽を流している状態が心に写りました。ハッとして上を見ても何も見えません。しかしその音楽はとても快いものでした。その後、同じく帰宅時数回くらい同様の印象を受けました。また別のある昼下り、勉強しようとして机に向かったとたん、何か強烈な思念が私を引きつけました。声では聞こえませんが、バイクに乗って来いという印象です。私は勉強しようとしていたので反発しましたが、間もなく近くの国道の風景がまざまざと心に写りました。そこで何が私を引きつけるのかその風景の中に該当者を見出そうとしましたがだめでした。少しするとその印象は消えましたが、その時は手を硬く握ってこらえていたのに気づきました。この頃友人を通じて円盤に興味を持ち始め、間もなくテレパシーという共通名称を知ったのです。

大学入学後もずっと興味を持ち続けてきましたが、やはり時たま

テレ体験をしていますので、おもしろい例を三つあげます。ひとつはある人と会う前に相手がどんな服装で来るのかなと思つた瞬間、その人の上半身がカラーで私の心に投影され、会ってみるとその通りでした。会う前は相互に十六センチ以上離れていました。しかもその人の髪型、衣類ははじめて見たものです。もうひとつは、ユン虫の視線を感じたことです。私の家は山のすそ野にあるので多くのユン虫を見かけます。そのうちムカデは直接触れるとケガをすることがあるので日常特に注意を払っています。ある時、自室に足を踏み込んだとたん、心にムカデの姿が写りました。まるでスライド映写を行なったように。トイレ、風呂場等でも経験しています。こんな時は探してみると必ず柱のすみにへばりついていたりします。クモでも同様の経験をしましたが、関心がないと感受できません。また別の例では、先日総会席上で話しましたが、バイク運転中事故発生予定二秒くらい前にその印象を受け、スピードを落として安全措置をとったので未然に防げました。もしその印象を無視していたら対向車線からいきなり追い越しを始めたら大型トラックと正面衝突していたかもしれせん。

最近では以前ほどしばしば印象を受けなくなりましたが、これはどうも私の生活が日常の雑事に捕えられてしまっていて、心をそれに集中させているのが原因のようです。しかし、心が静まっている時には頭が鳴っているのがわかります。この現象は小さい頃からありました。当時説明してもわかってもらえなかったもので、それきりです。どんな音かと問われても表現に困るのですが、強い発色雑音のようだと言えはあたっていていると思います。この音に関心を払い続けていると多少高音部へ移って行くように感じていきます。

さて、対人関係ではなるべく誰とでも親しくするのが自他にとつて最良とは思っています。私の経験領域では年令に關係なく親しくなるほどわがままを通し、外部の利を横取りするのが通例のようで、自分の心をも含めて油断がならず、この辺が障壁になりやすいので苦心しています。

心の持ち方ではやはりバランスが必要なのがかかるようになりました。極端な優越感や劣等感も障害になります。それでいて抜けられない人が多いのは、A氏の言ったように心の用い方を学んでいないのが原因のようです。

一方、心の均整のとれた人も時々発見します。このような人は關心が非常に広く、穏やかな性質の持主です。

以上の事柄のほとんどは未発表のもので。周囲の事情からしてうっかり口にする馬鹿扱いされるのが関の山だったからです。でも最近では各国の大学、研究所等でも本格的な研究に乗り出して、時おり公開しているので次第によくなると思います。未経験の人は大抵何らかの証拠を欲しているので、私個人的には印刷紙訓練などで知らせてゆくつもりです。

合 校 高

- 一 同封いたしましたガリ版印刷の「会合のお知らせ」は、例会の時に少しお話いたしました。十数人の生徒と私でアダムスキーの著書を中心に読書会・座談会・おしゃべりの会といったようにやっているものについてのもです。—中略—これらの生徒に「生命の科学」「死と空間を超えて」な

どを取り寄せてやったりしましたが、その後「なかなか内容が難しい」ということで私も生徒といっしょに勉強するという立場で、時々会合を開くようになったわけです。時には放課後一人で私のところにやって来て、夕方暗くなるまで、いろいろな問題について話し合う生徒も出てくるようになりました。現在は自ら積極的に求めてくる生徒に対してだけ、いろいろ相手になってやっています。—後略—

よるメッセージ

堀 川 と き

私は意識のメッセージに従って行動していたということに
がアダムスキー氏の本によりわかりました。たとえは戦争
意 中に「東京は大編隊でB29が攻撃に来る」という噂がなん
となく流れるのです。すると早速「東京にいては危い」というよう
な小さな声はつきりいつているのが聞こえるのです。そういう意
識のメッセージが何回もあり、その都度田舎へ行きました。そうす
ると田舎へ着いたばかりとか、少したってから東京の大空襲を切り
抜けました。

「テレパシー」を買ってから、色々な本を送っていたが、毎日
のようにアダムスキー氏の本を読んでいます。このあいだ本を読
んでいる最中に、全部の本のつながりから「アダムスキー氏は宇宙
人だ」というのを小さな声で感じました。宇宙人でも長老のような
人だと感じました。アダムスキー氏が意識のメッセージに従えば天
国のような暮らしが出来ると書いておられました。その生活に入り
つつありますことを感謝します。

円盤の電磁場

村 雨 光之介

前稿の〈UFOの推進力〉(NL#38)と〈UFOの科学〉(NL#40)にて、円盤の推進部に掛りてある電磁場は、①鉛直方向静電場 H_0 、②回転電場の回転磁場及び③トラス静電場の4種類である事を述べました。今回は、此等の電磁場がどの様に作用し、推進力を生じるかに就いて考えてみましょう。先づ、推進力となるのは飽く迄、重力であつて、電磁場は円盤の量子燃料のスピンや4元運動量を制御する為に使はれて居りまして、直接円盤の動力となつて居るのではない事です。其れには、文献1の220頁に「彼は小石を拾ひ上げ、其れを落し、そして又拾つてから動き出す身振をした。」とあります。小石が落ちるのは重力に依る自由落下ですので、重力場推進(文献2)と云う事でしょう。①の静磁場は、文献3の37頁で「此の円柱の頂上は、普通は陽極になつて居て、御覧の様に床を突き抜けて居る下部は、陰極になつて居るのです。」トスベンスブラザが言つて居る事から傍証される。陽極とは勿論磁極のNです。次に写真1の円盤にはっきり見える3個の球と回転電場の関係に就いて述べましょう。3個の球を、ア氏は「着陸用ギヤ」と称しましたけれど、コンデンサである点は、文献4及び5にも述べました。此れを第1図の如く3回対称に配置致しまして、3相交流を充放電致しますと、中心部に回転電場が生じます。即ち、各コンデンサをA、B及びCと致しまして、夫々に、 $\psi_0 \sin \Omega t$ 、 $\psi_0 \sin(\Omega t + \frac{2}{3}\pi)$ 及び $\psi_0 \sin(\Omega t + \frac{4}{3}\pi)$ を与えますと、A、B、C及びO、A間の電位差は、

$$\psi_{BA} = \psi_0 \left[\sin(\Omega t + \frac{2}{3}\pi) - \sin \Omega t \right]$$

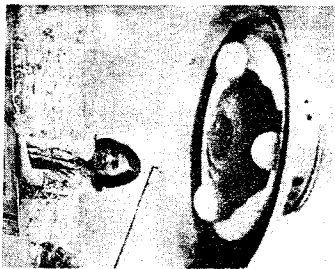
$$= 2\psi_0 \cos(\Omega t + \frac{\pi}{3}) \sin \frac{\pi}{3} = \sqrt{3}\psi_0 \cos(\Omega t + \frac{\pi}{3}), \quad (1) \quad \text{同様にして、}$$

$$\psi_{CB} = \psi_0 \left[\sin(\Omega t + \frac{4}{3}\pi) - \sin(\Omega t + \frac{2}{3}\pi) \right]$$

$$= \sqrt{3}\psi_0 \cos(\Omega t + \pi), \quad (2)$$

$$\psi_{AC} = \psi_0 \left[\sin \Omega t - \sin(\Omega t + \frac{4}{3}\pi) \right] = \sqrt{3}\psi_0 \cos(\Omega t + \frac{5}{3}\pi), \quad (3)$$

となります。式の変形には、高校の数学での和と差を積に変換する関係を想ひ起して下さい。従つて三角形ABCの一边を Ω と致しますれば、電場は夫々 $E_{BA} = \frac{\sqrt{3}\psi_0}{\Omega} \cos(\Omega t + \frac{\pi}{3})$,



$$E_{CB} = [\sqrt{3}\psi_0/d] \cos(\Omega\tau + \pi), \quad E_{AC} = (\sqrt{3}\psi_0/d) \cos(\Omega\tau + \frac{2}{3}\pi), \quad (4)$$

となります。所で、スタ・デルタ変換に依りデルタ型電場ヴェクトルダイアグラムは、スタ型に変換出来ます(文献6)(第2図)

$$\text{第2図の如く } E_A, E_B \text{ 及び } E_C \text{ を採りますと, } E_A = \frac{\psi_0}{d} \cos(\Omega\tau + \frac{\pi}{3}), \quad E_B = \frac{\psi_0}{d} \cos(\Omega\tau + \pi),$$

$$E_C = \frac{\psi_0}{d} \cos(\Omega\tau + \frac{5}{3}\pi), \quad (5)$$

です。(文献7)。E_Aの方向にx軸を、これに直交してE_Bの側にy軸を採りますれば、電場のx成分E_xは、 $E_x = \frac{\psi_0}{d} \cos\theta \times \cos\theta + \frac{\psi_0}{d} \cos(\theta + \frac{2}{3}\pi) \cos\frac{2}{3}\pi + \frac{\psi_0}{d} \cos(\theta + \frac{4}{3}\pi) \cos\frac{4}{3}\pi = \frac{3\psi_0}{2d} \cos\theta$, (6)となります。但し、 $\theta = \Omega\tau + \frac{\pi}{3}$ でした。同様に致しまして、其のy成分E_yは、 $E_y = \frac{3\psi_0}{2d} \sin\theta$, (7)です。勿論、三角関数の和を積に変換する公式(文献8)を用いました。即ち、電場の大きさは、 $|E| = \sqrt{E_x^2 + E_y^2} = \sqrt{(\frac{3\psi_0}{2d})^2 (\cos^2\theta + \sin^2\theta)} = \frac{3\psi_0}{2d}$ (一定), (8)であって、其の位相角φは、 $\tan\phi = E_y/E_x = \tan\theta = \tan(\Omega\tau + \frac{\pi}{3})$, ∴φ = Ωτ + $\frac{\pi}{3}$ (9)で回転電場が得られます。以上からア氏が着

陸用ギヤと称した3個の球(コンデンサ)は、重要な役割を果たして居るのが解ります。此の球の見える居る円盤の写真は、真びょう性があり、其の代りに変な物の附いて居る写真は、信用出来ぬと言う事になります。但し、此のコンデンサをカプラで覆って居る円盤も多い様で、此の場合は、反粒子場(反重力場)の対消滅発光の様子から判断出来ます。トルマン・ベサラムやダニエル・フライ(ホイットサンス事件)の場合は、カプラで完全に覆って居ました(文献9, 10)。故而、回転電場が存在すれば、其の直角方向に回転磁場も生じます。何とすれば、マクスウェル方程式の第1連、 $\text{rot } H = \frac{1}{c} \frac{\partial D}{\partial t}$ (10)で、 $D = \epsilon E = \epsilon(E_1 \cos\Omega\tau, E_1 \sin\Omega\tau, 0)$ (11)と(6)及び(7)に依拠して置きますれば、 $\text{rot } H = \frac{\epsilon\Omega}{c} \frac{\partial \tau}{\partial t} (-\sin\Omega\tau, \cos\Omega\tau, 0) = \frac{\epsilon\Omega\sqrt{1-\beta^2}}{c} (-\sin\Omega\tau, \cos\Omega\tau, 0)$

(12)となります。但しε及び $\frac{1}{\sqrt{1-\beta^2}}$ は、場の誘電率及びローレンツ因子(文献11)でした。此れから誘起される磁場Hは、

$$H = (-H_1 \sin\Omega\tau, H_1 \cos\Omega\tau, 0), \quad (13)$$

$$E \cdot H = E_1 \cdot H_1 (-\sin\Omega\tau \cos\Omega\tau + \cos\Omega\tau \sin\Omega\tau + 0 \times 0) = 0, \quad (14)$$

で直交致します。其処で、再び $\Omega\tau \rightarrow \Omega\tau - \frac{\pi}{2}$, (15)と置きますれば、 $E = -E_1 (-\sin\Omega\tau, \cos\Omega\tau, 0)$

$$H = (H_1 \cos\Omega\tau, H_1 \sin\Omega\tau, 0), \quad (16)$$

です。 $\frac{\pi}{2}$ だけずらせたのは、交流は何処から計り始めても作用は結局変らぬからでした。更に文献3)の37頁に依拠して、静磁場(0, 0, H₀)を加えますれば、 $E = -E_1 (-\sin\Omega\tau, \cos\Omega\tau, 0)$, $H = (H_1 \cos\Omega\tau, H_1 \sin\Omega\tau, H_0)$, (17)が円盤の中心部の電磁場と云う事になります(文献12)。三次元空間のヴェクトル図で表示しますれば、第5図の如くになります。因みに、標準の

円盤は、3個のコンデンサを有し、三相交流を使用致しますけれども、時には写真2の如く、5個のコンデンサを有して居る物も有ります。此の場合は当然5相交流 $\psi_0 \sin(Q\tau + \frac{4}{5}\pi)$, $\psi_0 \sin(Q\tau + \frac{6}{5}\pi)$, $\psi_0 \sin(Q\tau + \frac{8}{5}\pi)$ となります。一般に n 個の球型コンデンサを正 n 角形の頂点に置いて、円盤の製作が可能なのですけれども、 n の数が大きくなりますと、其れだけ技術上の困難が増しますので、 $n=3$ が最も一般の様です。ベツラムの場合のアウラの宇宙機は、 $n=4$ でありました(文献13)。即ち、次の様に述べてあります。<其の夜の訪問で、私の得た結論は、大型機の操縦は、四つの異った場所から成されて居り(中略)。あらかじめ決定した方向へ前後左右どちらへでも飛べるし何か極めて敏感な自動操縦装置も利用してあると云う事だ>と。此の場合は、交番ポテンシャルは、

$$\psi_0 \sin Q\tau, \psi_0 \sin(Q\tau + \frac{2}{4}\pi) = \psi_0 \cos Q\tau, \psi_0 \sin(Q\tau + \frac{4}{4}\pi) = -\psi_0 \sin Q\tau, \text{ 及び } \psi_0 \sin(Q\tau + \frac{6}{4}\pi) = -\psi_0 \cos Q\tau \text{ となります。}$$

即ち、アウラの宇宙機のコンデンサの配置は、第4図の様になって居る筈です。一般に、相の数が増すと、正 n 相交流の電力は、 \sqrt{n} に比例する(文献14)ので、其の点からはコンデンサの数の多い方が有利でしょう。抜而、コンデンサの間は何で満たされて居るか申しますと、写真1には白く見えて居ります。コンデンサの間に入れるのは、強誘電体が常識です。其の中で、白い物質は(A)チタン酸バリウム(BaTiO₃)又は(B)ロツゼル塩です。機械的強度と耐圧の点では、断然(A)が優れて居りますので、恐らく(A)が用いられて居りました。但し、成型加工は、(A)の方が遙かに困難でして、我々が模型を作る際に苦労する点です。更に、中心部の黒い部分は、フェライト又はフェロクスレナ(文献15)でしょう。後者は、高周波での磁気特性の優秀な、比較的新しい材料です。尤も、5,000年文明の進んだ友星の機関には、更に優れた磁性材料が用いられます。但し、我々が製作する時には、此の程度の材料となります。抜而、此等の材料に(17)の電磁場を掛けると、どの様になるのでしょうか? 其れには、先ず古くから知られて居りますマクスウェル・クラマース方程式(文献16)

$$\frac{dM}{dt} = \alpha (M \times H - M \times D), \quad \frac{dP}{dt} = \alpha (M \times D + M \times H), \quad (18)$$

を(17)の電磁場の許に解いてみる必要があります。但し、 $\alpha = g \frac{e}{mc}$ で、 M 及び P は軸性角運動量ベクトル及び磁気角運動量ベクトルです。 g は核 g 因子で、 α は電磁氣的相互作用定数です。 τ は固有時(文献17)です。固有時とは、普通の時間にエネルギー(或は速度)の補正が加わった物と御考下さい。結果だけ申上げますと、 P は第5図の如く、有効合成電磁場ベクトル $H + iE + Q$ / α の周囲を歳差運動(文献18)致します。極性角運動量 P の作用は、エネルギー固有値(文献19)を決定致します。即ち上向き時に正エネルギー状態に、下向きの時に負エネルギー状態となります。 $H + iE + Q$ / α ($Q = 0, 0, Q$) の Z 方向の成分は $H_0 + Q$ / α です。負エネルギーの条件は、 $H_0 + Q$ / $\alpha < 0$, (19) です。 $\alpha < 0$ に注意して、(19)の分母を扱いますと、不等号の向きは反転して、 $0 < \alpha H_0 + Q$ (20) となります。此れが負エネルギーの為、即ち円盤が浮き上る為の周波数条件(文献19(B))です。

$\alpha = -g \frac{e}{mc} = -3.6 \times 10^7$ ガウス/秒、程度が量子燃料である(A)チタン酸バリウム(B)フェライト(文献20)の相互作用定数です。で、 $H_0 = 10^2$ ガウスに対して、 $3, 6 \times 10^9$ ラヂヤン/秒 $< Q$, (21)



即ち周波数 f にして、1ギガサイクル $< f$ 、(22)です。即ち、円盤の使用周波数は、相当に高いと云う事になりました。 (22)は波長 λ (cm) にして、 $\lambda < 30 \text{ cm}$ 、(23)の程度でした。但し、磁場を逆向きに採れば、例えば、

$$H_0 = -100 \text{ ガウス} \quad (24)$$

と致しますと、 $0 < \alpha H_0$ (25)

です。低周波でも(20)の周波数条件は満足されます。扱而、極性角運動量制御の条件は、大略以上の通りです。原子の内部運動量は、(17)の電磁場の許で、どの様に動くでしょう？ 申し遅れましたけれど、(18)の μ や β は、量子燃料の各原子に就いての表現でした。其れは、又別の方程式、

$$\frac{d p}{d t} = \alpha \left(p \times H + q \left(E + \frac{q}{c} \alpha \right) \right), \quad \frac{d q}{d t} = \alpha p \cdot \left(B + \frac{q}{c} \alpha \right), \quad (26)$$

に従います。(p, i q)は原子の4元運動量(文献21)です。pは通常の運動量(文献22)で、gは其の運動量の時間軸方向の成分と御考下さい。或は、エネルギーのc分の1と考えて下さい。又、 $G = (0, 0, 0, -g)$ は外部重力場です。 α や τ に関しては、方程式(18)で説明致しました。(26)を解いた結果(文献23)のみ示しますと、

$$\frac{d Q}{d t} = m c \frac{a (a^2 + b^2 + d^2) \text{thar} + d b^2 \text{sind} \tau \text{sechar}}{a^2 + b^2 + d^2 - b^2 \text{cosd} \tau \text{sechar}} \quad (27)$$

です。但し $a = \frac{e}{c}$, $b = \alpha H_1$, $d = \alpha E_1$, 及び $d = \alpha H_0 + Q$ で、thar及びsecharは、双曲線三角関数(文献24)でした。

今、sechar $\rightarrow 0$ 、及びthar $\rightarrow 1$ ($\tau \rightarrow \infty$)です。充分に時間が経った後に、 $\frac{d Q}{d t} \rightarrow m c a = m g$ 、(28)です。所で、

$c Q = W$ はエネルギーです。で、 $\frac{d W}{d t} \rightarrow m g c$ ($\tau \rightarrow \infty$)、(29)です。此れは、各原子mに就いての表式です。但し $\mu = \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2}$ (換算質量)です。ア氏の

チタン酸バリウム m_1 と (B)フエライト m_2 に就きましては、 $\rightarrow \mu g c$ 、(30)です。但し $\mu = \frac{m_1 m_2}{m_1 + m_2}$ (換算質量)です。ア氏の

円盤(写真1)の場合は、直径30フイート(文献25)、即ち直径10m内外(土星の物は更に大きい。此れは金星のスカウトシップ)です。から、 $m_1 = m_2 = 2,000 \text{ キログラム}$ あります。即ち、 $\mu = 1,000 \text{ キログラム}$ 程度です。従って、

$$\frac{d W}{d t} = 3 \times 10^9 \text{ キロワット} \sim 30 \text{ 億馬力} (31) \text{ 程度は馬力が出ます。但し、大略1キロワット} \sim 1 \text{ 馬力として、換算致しました。}$$

(正確には、750ワット $\sim 0.75 \text{ キロワット} = 1 \text{ 馬力}$)。NASAのサタンロケットが、3,000万馬力程度であり、出力を上げたムスタングが、500馬力程度である事を考えると、如何に円盤の馬力が大きいかが解ります。オソン(ア氏の会ったウラニデス)は、月旅行に使える程度の<反粒子機関>を母船との連絡用に使用して居ます。彼等の工学レベルの高さの一端でしょう。化学ロケットは、燃焼してしまえば、其れ以上は馬力が出ないのです。量子燃料の円盤の場合は、外部重力場の消滅せぬ限りエネルギーの流入は続きます。そのも、大きな利点です。其れに就いて、ダニエルフライの会ったウラニデス(文献2)のプラン(文献26)は<貨物や旅客を輸送する乗物を設計する際、地球の技術者は、エネルギーを発生する動力源は其の乗物の内部に据えなくてはいけなと考える。だが、彼等の祖先達は、内部には動力源を

持たないで、大気の運動エネルギーのみを利用して動く帆船に乗り(中略)。希望の結果を得る為には、其の云うエネルギーを流す装置 工夫すればよい。と言つて居る。<反粒子機関>は、尙に其の様な物なのです。申し遅れましたが、(30)の右辺は、外部重力場の量子燃料に対する仕事率です。其の際、外部重力場のエネルギーが、<反粒子機関>に流入するのです。尤も、此のエネルギーが全て宇宙機機を上げる為に使われるのではなく、大部分はロツクコイル(パワコイル)のオーラム損失で消えます。即ち、最初に述べました④トラス磁場の問題が残つて居りました。円盤の周囲にトラス磁場の存在して居る事は、前記のウラニヂス(文献2)が、文献27で次の様に述べて居ります。

<両極の構造物質には、君達には全く想像もつかぬ程多くの自由電子が含まれて居る。此の電子を制御装置に依り、機の上部和下部に見える動力環を貫いて流れさせる。>と。実は、此のトラス磁場は、地球の電子工学者や物理学者の夢想だにせぬ装置です。量子燃料の周囲に、其れから離れてトラス磁場を掛けても、何の効果も無いと一応は考えられます。確に、10000ガウス程度以下では、効果は現われませんけれど、此の値を越えて、又(177)の電磁場で、方程式(26)に従つて内部4元運動量を揃えた時には、効果が現われます。実験には其の通り出て来ます(後述)。其れは、電磁場(177)で、内部4元運動量を制御しても、熱擾乱がありますから、1000の値は期待出来ないのです。1000バセントどころか、10000ガウス程度の磁場では、百万個の原子のほんの僅かしが反原子に変換されません。例えば999バセントの原子が0変換(反粒子への変換)を受けるに充分なトラス磁場の円周成分hは、次の關係に依拠して定ります。

$$100 = \frac{\alpha m c a b h}{6 k T r^2} \quad (32)$$

但し、k T, m, a, b 及び r は、夫々熱エネルギー、原子の質量、 $a = \frac{\alpha |K| |H|}{k T}$ 、 $b = \frac{\alpha |H| |E|}{k T}$ 及びロツクコイルの

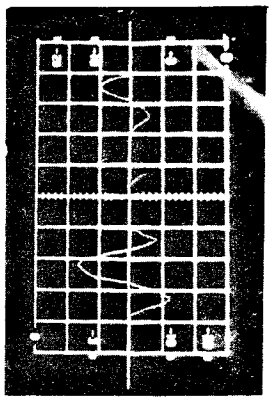
半径です。T=3000° K, $m \approx 10^{-24}$ グラム、 $\alpha |K| \sim \alpha |H| \approx M_0$ (ボア磁子)、 $E_1 = H_1 = 1000$ G, G, S, $H_0 = 100$ 00 ガウス、 $r = 1000$ cm 程度と致しますと、 $h \approx 2 \times 10^7$ ガウス(33)となります。一方(31)からロツクコイル(ア氏はパワコイルと称した)のパワは、最大限 3×10^9 キロワット $= 3 \times 10^{11}$ ワットですので、一方ロツクコイルの抵抗は 10^{-4} オム程度には作れますので、其の電流 i は、 $i \leq 3 \times 10^{11}$, (34)

なる不等式で示されます。即ち、 $i \leq 5.5 \times 10^7$ アムペア(35)は可能です。(35)と(33)を比較して、大略実現可能です。又、円盤のパワコイルは、其の上部に装着してあり、コンデンサコイルより小さく小ざらなつて居ります。此れは(32)で其の半径 r が増しますと、ロツク磁場 h の値が非常に大きくなり過ぎるので、小さく作るのです(文献27)。(35)は、パワコイルの電力条件ですけれども、(33)を供給するだけ、パワコイル(ロツクコイル)にフイロパワックされる電圧も大きくなければなりません。其の電圧は、重力の加速で生じる物で、
$$\psi = \frac{-dL}{g c} \mu g \quad L(\beta) \quad (36)$$

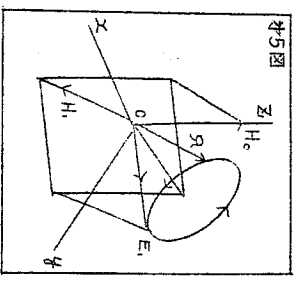
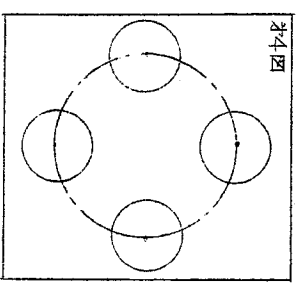
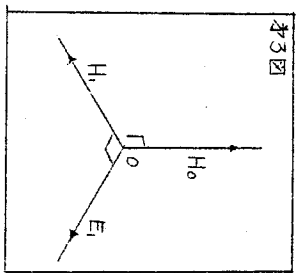
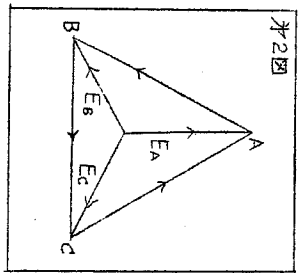
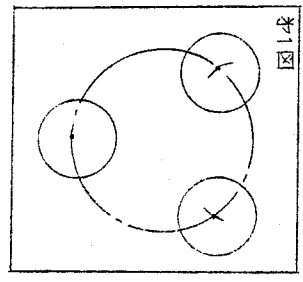
程度です。但し、L は量子燃料の重心を通る鉛直無限遠直線とパワコイル(ロツクコイル)との相互インダクタンス(文献28)です。L(β)は、前記のトラス磁場に関する確率で、(3-3)の値に対して、 $L(\beta) = 0.99$ (99バセント)でした。g, α 及び μ は、前に説明致しました。L=10⁻⁶ ヘンリとして、写真1の円盤に就いて、前述した様に μ=1 トン=10⁶ グラムと致しますれば、 $\psi = 6.0 \times 10^6$ e, s, u, =1, 8×10^9 ボルト、(37)となります。此れは、前記の抵抗値に対して、(33)の磁場を与えるのに

充分の値です。但し、(3.6)は、 O, G, S , 表示ですので、 \sim ソリはセンサトル(O, G, S , の値)に直して算定致します。確に円盤の電圧も電流も非常に高い事が解ります。(3.7)や(3.3)の電圧や電流を定常的に得る事は、通常のバッテリーやトランスを用いたのでは、絶対に得られません。重力の加速に頼る以外にないのです。又、重力の歪エネルギーは、以外と大きく、1立方センチ当り、

(3.8) $w=1.5 \times 10^{11}$ エルグ/立方センチ、もあります。扱而、以上に依りまして、量子燃料は完全に負エネルギー体となります。其の時アインシュタインの方程式(文献3.1)に従いまして、 μg で上方に出来ます。此れが円盤の推力です。即ち、 $\mu=1.0000$ キログラムならば、推力は10000キログラムです。即ち、写真1の円盤は、其の程度の推力でして、最大数人は人間が乗れる訳です。尚、NL#38の写真の励起コイルにU-Y-8077単段の微分器で、パルスを入れた時のコンデンサコイルの応答は写真3の様になりました。



参考文献 1)G, アダムスキ, 空飛ぶ円盤発見記(1969)高文社。2)柴野拓美、科学読売(1959年8月)読売新聞社。3)G, アダムスキ, 空飛ぶ円盤同乗記(1958)高文社。4)村雨光之介、日本GAPNL#40(1969)25。5)村雨光之介、日本GAPNL#38(1969)5。6)高橋秀俊、回路、装華房(1962)38。7)村雨光之介、超対称理論、二宮工房(1969)附録A-5。8)(A)河田竜夫、解析IIの研究、旺文社(1953)254。(B)村勢一郎、数学II B、清水書院(1966)79。9)T. ベサラム、空飛ぶ円盤と宇宙(1957)巻頭図。10)ダニエル・フロイ、我々は円盤に乗った、CBA International (1959)57。11)矢野健太郎、相対性理論、至文堂(1964)41。12)清家新一、(A)GAPNL#37(1969)32。(B)第11回宇宙科学技術講演会抄録(1968)44。(C)第8回国際宇宙科学技術シンポジウムフロロソングス(1969)a-1-7。13)=9)122。14)大山松次郎、電気工学通論、オム社(1958)109。15)G. H. Jonker, Philips, Tech, Rev, B(1956)145。(A)H. A. クラウス、フイジカ, 1(1934)825。(B)清家新一、GAPNL#37(1969)32。17)(A)猪木正文、宇宙時代の常識、講談社(1968)66。18)山内恭彦、一般力学、岩波(1965)139。19)梅沢博臣、量子力学、装華房(1959)90。20)東京電気化学KK編、TDK1969年ラニエトル(1969)。21)=11)86。22)藤岡由夫、物理B、大日本図書KK(1966)74。23)=7)第5章。24)岩切晴二、微分積分学精説、培風館(1953)29。25)=1)241。26)=10)41。27)=3)巻頭図28)高橋秀俊、電磁気学、装華房(1960)244。29)平野威馬雄、此れが空飛ぶ円盤だ高文社(1960)90。30)L. ランダウ、テオリア、ポエリヤ、モスクワ(1962)377。31)=7)第10章。



絶賛刊行中 **超相対性理論** 村雨光之助著 B5版・247頁
¥500・〒100

円盤の動力の解析とタイムマシンの定式化!

申込先・798愛媛県宇和島市
大宮町1丁目4番12号
清家新一(宛)

内容 (1)全角運動量方程式 (2)相対論的球関数 (3)誘電分極量子演算子 (4)清家クラマス方程式 (5)状態運動量の従う方程式 (6)超光速ロレンツ変換 (7)多重調和方程式 (8)重力直接発電(重力エネルギー密度、統計熱力学的確率、ロック磁場、出力電圧、発電容量、実験結果) (9)反粒子機関(=円盤)(反粒子の重力場、反粒子機関の推力と出力) (10)時間反転機(=タイムマシン=航時機) (11)付録(A)4次元数学諸公式 (B)懐しのメロディー (C)研究を開く言葉(和歌、漢詩、小説、各言) ©詳細資料御希望の方は〒25同封、著者宛申込まされたい。

*現金書留・小切手可
郵券不可

新刊 **空飛ぶ円盤とアダムスキー** 久保田八郎編 新書版
— 死と空間を超えて — ¥480 = 85

かつて日本GAPが刊行した「死と空間を超えて」が絶賛りに品切れとなり、再版が待たれていたところ、有信堂高文社よりアダムスキーシリーズの一環として上記の題で刊行された。金星旅行記や土星旅行記等を含む驚異的な体験記類と宇宙哲学の論説、日本GAP代表久保田八郎に宛てたアダムスキーの数十通の書簡全部を公開。研究家必携の書。御注文は必ず有信堂高文社へ(113-91 東京都文京区本郷5-30-20)または書店へ。

新刊 **生命の科学** B6版・170頁
G・アダムスキー著 ¥420 55

発行所
東京都文京区白山1-29-12・文久書林

これもかつて日本GAPでタイプ印刷本を発行して大好評を博した結果、文久書林より本格的活版印刷の単行本として新装の上刊行された。G・アダムスキーが宇宙のブザーズから伝えられた人間の生き方を十二課に分けて説いた万人必読の書。現代の聖書であり、これを読んで生活に実践すれば奇跡が生じるといわれる。同書林発行のアダムスキー著「テレパシー」の姉妹編としてあなたの書架へぜひ一冊を。御注文は必ず直接文久書林へどうぞ。

復刊 日本GAP副機関誌

— 宇宙同好通信改題 —

宇宙通信 43号

1部送料共125円。発行は日本GAPなるも、申込先は下記の所であるから間違えないように注意されたい。

171 東京都豊島区西池袋4-3-3
福和荘7号室
山本佳人(宛)

この機関誌は<副>として、ニューズレターに掲載しきれない記事をのせるので、会員の親しく機関でもあるから、購読者は編集者の山本宛にどしどし投稿されたい。

日本GAPニューズレター旧号

次のものが在庫あり。ご注文は東京都江戸川区篠崎6-231、日本GAP宛にされたい。
第34、35号(以上各130円) 第36、37、39、40号(以上各150円。送料は一切不要。第38号は品切れ)

隔月刊 **超心理研究専門誌**

テレパシー

テレパシー、透視、千里眼、予感、予知、念写、思念写真その他の超心理現象を研究するまじめな専門誌で、この方面に関心ある人には必読の誌。主宰者市村俊彦氏は物理学者であって、超心理を科学的に解明しようとするすぐれた研究者である。

◎入会金200円。年額1,000円
◎1部定価200円、送料65円。
◎発行所=950-02新潟県中蒲原郡横越村横越 超心理研究会

— 隔月刊誌 — **たま**

221世紀の文明のあり方を目指して物心両面から人間の生き方を追求し、覚醒への警鐘を打ち鳴らして、宇宙意識への道標と旗印を掲げんとするバイオニア誌。特に第13号より久保田代表の「宇宙意識開発講座」が連載されている。
◎発行所=東京都新宿区納戸町3-3、西応ビル内 たま出版 ◎1部送料共135円。年間720円。

◎年頭には多数の会員各位より御祝詞をたまわりまして厚く御礼を申し上げます。例によって当方は一切失礼しましたが、御厚意は心から有難く頂戴しました。実際、困難と狂気に満ちたこの世界にいて、温かい激励の御言葉をたまわるほどうれいことはありません。万人は結局友情を欲しているのではしうが、人間の实体が理解できぬままに誤解が生じ、敵対関係が生まれます。「敵とは自分を誤解する友にすぎない!」というのは、かつてアダムスキーがパロマー・ガーデンズに住んでいた頃、広場の樹木にぶらさげてあった木片に刻まれた言葉です。

◎本号はアポロ計画にちなんで「月特集号」としました。発行が大巾に遅れて全く申し訳ありませんが、これはすべて編者の生活環境に起因するものでありまして、編者にヤル気がなくなつたのではありませんから御安心下さい。いつつく夜空の星々をながめれば幼時に持っていた前生の記憶をなつかしく思い出します。といつても何のこともかおわかりにならないでしうが、ここでは詳述を避けることにします。

◎「生命の科学」が文久書林より本格的な単行本として出版されました。同書林の岸社長に深く感謝する次第です。同社長は編者の郷里島根県益田市に近い浜田市の御出身で、若い頃は柔道の猛者として鳴らしたスポーツマンであり、戦争中は浜田二十一連隊の歩兵大隊として中国大陸を転戦されましたが、その間いろいろを神秘的体験を持たれたとのことで、特に出撃前の点呼の際に兵の顔を見ることによつてその日のうちに相手が戦死する運命にあるか否か予知できたという事です。アダムスキーにも深い興味を寄せられ、高文社刊のアダムスキー関係訳書の出版にも同氏が原動力となられました。

◎なお日本GAP版「生命の科学」(タイプ印刷、一部三〇〇円のもの)は一部一〇〇円でおわけします。送料不要。文久書林版は日本GAP版を活版印刷にしたものですが、ミスプリ等を除去してあります。

◎「テレビッシーの体験」と題する記事を寄せられた高原光夫氏は明大工学部電気工学科四年在学中、横須賀市にお住まいの熱心な学徒です。

◎おなじみの村雨光之助(清家新一)氏がまた「円盤の電磁場」と題する論文を寄せられました。同氏の学説は難解ですが、理解できる人もあるようで、氏の「超相対性理論」は海外からも引合が殺到しているとの由、喜ばしいことです。特に米国ロチェスターのアダムスキー派、勇氣ある男、W・T・シャーウッド氏は二冊注文し、一冊をニクソン大統領の科学顧問に渡すという事です。村雨氏は去る一月二十九日に東京都調布市の航空宇宙技術研究所で開催された、第十三回宇宙科学技術講演会に出場し、「反原子宇宙機」と題する講演を行ない、二十一世紀の科学の先駆者としていかんなく面目を發揮しました。来たる四月一日には高知大で行なわれる物理学会で「反粒子の重力」と題して発表されるとの事です。同氏は今年中は実験に主力を注ぎたいけれども資金不足で思ひようにゆかず、さしあつて十万円を要すること、援助の意志ある方は直接同氏宛御連絡下さい。住所は右頁の広告中にあります。

◎当方への会費その他の御送金はなるべく振替を御利用下さい。

◎日本GAP東京本部の月例研究会、大阪支部の月例研究会は毎月確実に行なわれています。詳細は本誌第40号の31頁をごらん下さい。

◎とにかく頑張りましたしう—お互いに。(久)

日本GAP ニューズレター 1970 第四一號

翻訳編集発行人 久保田 八郎

発行所 日本GAP

133 東京都江戸川区篠崎六丁目二二一

電話(六七九)三二四七

振替 東京三五九一二

(久保田八郎個人名義)

頒価一五〇円・送料三五円

★禁無断転載

昭和45年 発行
2月28日

—不定期刊—